

「水箱の電車を拵へたらよい。」といふものや、「水の飛行機がよい。」などと、一生懸命になつて考へました。其中兄さんの蛙が、

「あゝ、よい事を考へた。此池とお隣の池と續くやうにしたらよい。」と、言ひましたので皆は、

「さうだ〜。」と、賛成しました。

それから皆の蛙は毎日朝早うから、夕方迄池と池との間の土を手でゴシ〜と掘り取りました、餘り手が痛くなつたから、木片を拾つて来て掘つて居るのもありますし、土を運んで捨てに行くものもあります。皆汗を流して一生懸命です。段々道が掘れて來ると兩方の池の水が通ふやうになりました、丁居瓢箪の様な池になつたので、蛙は躍り上つて喜びました。そして、

「金魚さん〜お出でなさい。」

と、大聲で呼びますと、金魚も、

「よい道をつけて下さいまして、嬉しい〜。」

と、言ひ乍らあちらへ行つたり、こちらに來たりして、何時迄も仲よく暮しました。

三七、風鈴物語

玉雄さんと、鈴子さんが、行水をすまして、縁側に出て、仲よく涼んで居ました。すると、軒端につるしてある風鈴が、チリン、チリン、チリン、チリン、チリンと、涼しさうになりましたので、二人は喜んで、

「涼しい風が出て來たと、わたしの好きな風鈴が、涼しい聲で知らしたよ。」

と、歌つて風鈴をほめました。

間もなく一つの風鈴が、だんだんと、大きくなつて、二人の前へ來て、

「玉雄さんに、鈴子さん、あなたは、いつも仲よしで感心してゐます、私は一緒によいところへ、お供いたしませう、どうぞ私の脊にお乗り下さい。」

と、いひました。

それで、二人が其風鈴に乗りますと、風鈴は、チリン、チリン、と、鳴りながら、段々と高く飛んで行つて、富士山よりも高くなりました。

だん／＼あがつて、天へ昇りますと、天にお出でになる風鈴の神さまが、二人をお迎へ下さいました。そして、

「玉雄さんに、鈴子さん、いつも私の家臣の風鈴を、可愛がつて頂いて、有りかたうございます。今日は、風鈴の宮で、ゆつくりお遊び下さい。」と、申されました。

それから風鈴のお宮へ案内して貰ひまして、玉雄と、鈴子とは、そこで色々御馳走になり、面白い踊などを見せて貰つて、楽しんでゐましたが、お家の事が氣になりますので、おいとましました。

すると、風鈴の神様は、

「これは、お土産のしるしですが、この風鈴は飛行風鈴と云つて、是を手にとつと、

飛行機に乗つたやうに、何處へでも飛んで行きます。いつでも乗つて御覧なさい。」と、いつて珍らしい風鈴を下さいました。

二人はそれを持つてお家へ飛んで歸りました。

それから、毎日お土産に頂いた風鈴に乗つて、面白く遊びました。

三八、飛行機蜻蛉

太郎は何の玩具よりも、飛行機の玩具が一等好きでした。又玩具よりは、本當の飛行機が一番好きでした。

どうかして只一度でよいから、あの鳥の様に、又風の様に空高く上つて見たい。そして知らない星の世界へ行つて見たいと、いつもいつもこんなことばかり思つて居ました。

或晩のこと、お父様が「坊やお前の一等好きなものを買つて来たよ、さあ、あてゝ

らん。一番上にヒがつくもの何でせう。」
 太郎さんこれはきつと飛行機に違ひないと思ひましたから、勢よく「お父さん飛行機
 でせう、僕嬉しいー」

もう嬉しくて直に上げて見たい、お座敷へ行つて、プロペラを廻して、今上げやうと
 した時お母さんが、

「太郎やこは狭いから明日の朝お庭の廣い處でおあげなさい、今ここであげては
 こはれますよ。」

太郎はそれが耳に入らず、お手を放しましたから、太郎さんをはなれた飛行機は、プ
 ーンと、うなりをたて、飛んで行つて、むかふの障子につき當つて、見事墜落してし
 まひました。

太郎も喫驚して駆つて参りましたら、たつた一度の飛行で羽根をめちやくに破つて
 しまひました。

お母さんもお父さんも、それぞらん、明日はこの羽根の處をおなほしなさいと、いは
 れました。

太郎さんは、つまらない顔をして、それでも大切に、へておねまへ入りました。
 翌朝になつて早速飛行機をなほしにかかりました。

なか／＼なほりません。その内、表の方で、わあーわあーと、いつて居る聲がする。
 近所が騒がしくなつてきた。これはきつと飛行機が来たのでせうと思つて、とび出し

て見ますと、飛行機ではなく大勢の子供が蜻蛉を釣つて居ます。中に竹の先に糸を結
 びつけて、それへ蜻蛉をひつく／＼つて振り廻して居ます。

蜻蛉はどんなに眼がまはるでせう。
 他の蜻蛉は糸にくくられた蜻蛉のまはりに集つて飛びまはつてゐます。それを他の子

供が竹の先に、もち、をつけて捕らうとしてゐます。
 太郎はこれを見て、空を自分の思ふ様にかけることの出来る蜻蛉をこんな目にあはし

て居るのが可愛想になつて來ました。
 僕は蜻蛉になつてもよい、空を飛んでみたいのに、あの蜻蛉達もきつと／＼空を飛行

機のように飛んで、お父さんお母さん達の居る處へ、歸つて行きたいでせうと思つたらたまらなくなつて、お友達に

「君達は蜻蛉をそんなにひどい目にあはさずに、逃がしておやりよ、そして他のあそびをしませうや。」

と、云ひましたが、皆ききません。

それで太郎は、大變蜻蛉が可愛相になりましたから、いきなり一人の子供の蜻蛉の糸を切つてやりました。

糸がきれると、さも嬉しうに元氣よく飛び上り、くると廻はつて、宙返りして、飛んで行つてしまひました。それと一緒に他の蜻蛉も皆逃げて、一匹も其近所に居らなくなりしました。さあ怒るまいことか友達等は、直様太郎に飛びかかつてきました。

太郎はびつくりして逃げ出しました。どんくくくくくくからツツ、言つて追ふて來ます。とうく向ふの路次の處へ追ひつめられ、坂場の方に挟まつて、どうすることも出來なくなりしました。

子供達はもち竿を槍の様につきたて、向つてきました。さあ、もうどうすることも出來ない。

困つたと思ふ間もなく、爆音高くふとやつてきたものがある。あつと思ふ間に太郎の身體は、空中へ引き上げられて行ききました。

あれよあれよと云ふ聲に喫驚して、ふと下を見ると、お屋根よりも高く上つて居る。

はつと思つて見ると、飛行機に何時の間にか乗つてゐます。うれしくてくく思はず皆さん万歳と云ひましたら、今迄怒つて居た子供達も一緒に、にこく笑つて太郎君万歳と云ひました。

太郎の飛行機はスーッと、飛んで雲の奥深く入つて行ききました。

あまりの早さに目を廻した太郎が、氣がついて見廻すと、向ふの方で何とも云へぬよい音がします。(オルガンの高い綺麗な音か、バイオリンの高調の其流を聞かひむること尤もよし)園りは白百合、なでしこ、桔梗、朝顔、など美しい花が一面に咲いて、其づつと向ふに綺麗なお山があつて、噴水や池、蓮の花、太郎はもう夢中になつてし

まひました。

飛行機は何處へ置いて来たのか、側にはありません。

其中に立派な御門の前へ来ますと、獨り門がスーツと兩方に開いてきれいなお姫様が

澤山居られます。

太郎は不思議でたまらない、其一人にきいてみますと、此處は蜻蛉の國でこれがお天子さまの處です。

さう坊ちゃんお入りなさい。待つてゐましたと申します。入つて見ますと、それは立派な御殿です。

正面にお天子さまがいらつしやると、兩方に大勢のお家來がすらりと竝んで、お頭を下げて居ります。

太郎は平氣でチヨコくくと、お天子さまの處までまゐりまして、蜻蛉の家來が出てくれる椅子に、腰をかけました。

お天子さまは、太郎さんの處へまゐりまして、

「家來の蜻蛉共が、今朝は大變お世話さまになりました。危い所をよくお助け下さいました。

今日はこれからお禮の印に蜻蛉の國の御馳走や、踊をお目にかけてませう」

まもなく家來共が多勢で御馳走を運びました。しばらくするとよい音楽と一緒に蜻蛉の踊が始まりました。それは面白い、太郎はお家の事も、お父さんのことも、お母さんの事も忘れて居ました。

すると、向ふにかけてある大時計が、四時をうちました。

「お、もう四時です、早くお家へ歸らんとお母さんに心配をかけます。」

其處でそのことを蜻蛉の天子さまに云ひますと、

それではお歸しいたします。どうかこれをお土産に、お持ち歸り下さつて、いつでも來たい時には、又いらつして下さい。「其時には蜻蛉の國へ行け。ボンボン、といつて下さつたら、この玩具の飛行機が直きにはんどのものになります。」

太郎は嬉しくて、大切にそれを持って又飛行機蜻蛉に乗つて歸つてまゐりました。

三九、露子さんと金魚

或晩の事、露子さんがお庭のお池の傍で遊んで居りました。そして水の上をのびと見ておますと、お池の水の上に大きな象の形をした雲や、鹿の形をした雲が映りました。そして其の雲はズン／＼何處へか行つてしまひます。露子さんはお池の金魚が今日も又水の上に浮いて来るだらうと思つて、待つて居りますのに、幾ら待つても出て参りませんから、しまひには泣きさうになりました。

「露子さん。露子さん。」

と呼ぶものがありますので、誰かと思つてお池の水の上を見ますと、金魚が一匹浮いて居ますので、露子さんは大變喜びました。そして

「金魚さん／＼私はさき程から、どんなに待つたか分りません、さあお母様に貰つた駄を澤山持つて來ましたから、上げませう。」



と言つて金魚に麩を投げてやりました。
赤いのや、白い金魚が澤山集つて來まして、おいしさに皆その麩を食べてしまひました。

金魚は

「露子さん。大變おいしう御座いました。何時も頂戴ばかり致しますから、今日はお禮に面白い踊りを一つ見て頂きませう。」

といつて皆で面白く尾を振つたり、鱗を動かしたりして踊りますので、露子さんは面白いくと大層喜んで、見て居りましたが、餘程遅くなりましたので、金魚は

「又明日お目にかゝりませう。左様なら。」

と水の中に沈んで行きました。

露子さんは暫らく水の上を見て居りましたが、金魚はもう一匹も居りませず、又面白い雲が水の上に映つて居りました。其時丁度東のお山の方から、圓るい〜お月様がニツコリ笑ひながらお出ましになりましたから、露子さんは可愛らしいお聲で、お月

様のお唱歌を謡ひ出しました。するとお母様が

「露子さん。露子さん。御飯をいたゞきませう。」

とお呼びになりましたので、急いでお家へ歸りました。

四〇、雀の飛行機

太郎さんと芳子さんは、毎朝早く起きて、お庭へ出て遊びます。

今朝も亦早く起きて、二人で仲よくお遊びをして居りますと、何だか悲しそうな雀の鳴聲がきこえました。

「あら兄様雀が鳴いてゐます。あんなに悲しさに、まあどこでないてゐるのでせう。」

二人はお庭のあちらこちらを探しまはりました。

すると丁度垣根の下に、一羽の雀が羽根をばたばたさせて、苦しうにチウ〜と、

ないてゐました。

「芳子さん、ここに居るよ、お、羽根が折れてゐるよ」

と、いつて二人が近づいてよく〜見ますと、小さい雀が羽根を折つて、飛ぶことが出来ないで、悲しんで居ります。

「あ、可愛相にこんな血が出てゐるよ。」

太郎さんは、手の上にそつとのせて、お家の中へ持つて来ました。そしてお母さんに、
「お母さん、雀がこんなに羽根を折つて苦しんで居ります。お薬をつけてやりませうか。」

と、いひますと、お母さんは直ぐ、立つて、お薬を持つて来て、

「さあ、これをつけておやりなさい。」

と、太郎さんにお渡しになりました。
太郎さんと、芳子さんは、そのお薬を雀の傷口につけてやりました。そしてお庭の中から鳥籠を出して来て、雀をそつと入れてやりました。芳子さんは、お米をお皿に

入れて持つて来て、

「さあ雀さんお米をお上り。」

ど、いつて籠の中へ入れてやりますと、太郎さんはまたお茶碗に水を入れて持つて来て、その中へ入れてやりました。太郎さんは學校から、芳子さんは幼稚園から歸りますとすぐに、雀のところへ来て、

「雀さんおとなしくまつて居て下さいましたね、もう大分よくなりましたか、もつとお米を上げませうかお、傷口も大分よくなりましたね、早く早くよくなつて頂戴ね。」

ど、いつてお見舞してやりますと、雀も嬉しいと見えて、チウ〜といつて鳴きます。こんなにして丁度二日程大切にしてやりましたら雀の傷はすつかりなはつたと見え、どう〜籠の中で、ばた〜と、飛ぶ様になりました。

「兄さん一寸来てもらん、雀さんが飛んでゐますよ。」

ど、いひますと、奥の間で勉強してゐた太郎さんも走つて出て来て、

「あ、ほんとによくなりました、もう大丈夫でせう。さぞ雀さんのお父さんや、お母さんが、まつて居られるでせうから、逃してやりませう、サア雀さん早くお歸り。」

ど、いつて籠の入口をわけてやりますと、雀はうれしさにバタバタと、お庭を越えて垣根も越えて、ズツと向ふの方へ飛んでいつてしまひました、

或日曜の日太郎さんと芳子さんの二人が、お庭へ下りてお花をとつてお遊びをしますと、屋根の上に澤山の雀が、チウ〜とやかましくいつてゐます。

そしてあまり澤山で、なか〜數へられない位泣いてゐました。

「アラ兄様雀さんが、澤山お屋根の上にもいますよ。」

「此間の雀さんもゐますよ。」

ど、見てゐますと、雀は急に皆パーと、お庭へ降りて来ました。そしてこの前の雀さんが、

「太郎さんや芳子さん、今日はお父様や、お母様や、叔父さんや、伯母さんや、親

類の者が皆で御禮にまゐりました。先日はどうも色々とお難う御座いました。」

ど、お禮を申しました。
 太郎さんも芳子さんも大層よろこんで、すぐにお米をたくさんまいてやりますと、雀も大喜びでたべました。

あまり澤山たべましたので、お腹が大きくなつて、そこへねてしまひました。

「あゝ芳ちゃん雀さんが皆寝てしまひました。どうしませう、さうく僕はよい事を考へました。

此の雀さんで飛行機をこしらへませう、芳ちゃんはお母様に、長い糸をもらつていらつしやい、僕は盥を持つて來ますから。」

どいつて、二人は大急ぎでお家へ入つて、糸と盥を持つて來ました、そして寝てゐる雀さんの足を、つぎくに糸でくくりまして、それを盥のまはりに結びつけました。「さあこれで雀の飛行機が出來た、二人とも旗をもつて飛行機にのりませう。」
 太郎さんと芳子さんは、雀の飛行機にのりました。

「二人で手を叩いて雀さんを起しませう、サア、一、二、三、」
 二人が手を叩きますと、雀はみな眼をさまして、一度にバアーツと飛び立ちました。すると二人ののつた雀の飛行機は、ズン／＼上にあがりました。太郎さんも芳子さんも大喜びで日の丸の旗を振つて、

「あゝうれしいなく、あゝおもしろいな、あらお家があんなに小さく見えるよ、お城があんなところにあるよ、兵隊さん、澤山戦のけいこをしてゐますよ、こちらの方には天神橋が見えますよ。」

ど、二人は喜んで、方々を眺めました。
 雀さんは皆、力一杯バタ／＼と、飛びますので雀の飛行機はズン／＼進んで、とうとう天王寺の邊まで行きました。

「ヤア天王寺の塔より、僕の飛行機の方が高いよ、下を通つてゐる人は蟻のやうに小さいな。」

ど、話をして居りますと、何だか向ふの方から蜻蛉のやうなものが、大きなく音を

立て、飛んでゐるのが見えませんでした。

「兄さんあれは何でせう、とんぼのやうですね、あれ〜あんなに早く飛んでゐますよ、だん〜こちらへ来るやうですね。」

ど、いつて居ますと、大きな音はだん〜近づいて来ました。見ると、蜻蛉だと思つたのは、大きなく〜飛行機でした。

「ヤア飛行機だ万歳々々、あれすん〜こちらに来るよ、をぢさんが乗つてゐるよ」二人は旗をふりながら飛行機にまけずにとびました。

「飛行機万歳！」

ど、大きな聲で申しますと、あちらからも、

「雀の飛行機万歳！」

ど、をぢさんがいつて下さいました。

二人は大喜びで、日の丸の旗を振りたてますと、飛行機はまたすん〜あちらの方へ行つて、だん〜見えなくなりました。

「どう〜飛行機も見えなくなりました。あのをぢさんも歸るのでせう。僕等も、もうそろ〜歸りませう。サア雀さん、今度はお家の方へ飛んで頂戴。」雀の飛行機はおうちの方をさしてスゴ〜進みました。

「芳ちゃんおうちへ歸りましたよ、二人で手を叩いて歸りませう。一、二、三、」二人が手を叩きますと、雀の飛行機は、ス〜と、おうちのお庭へ下りました。お父様も、お母様も、お友達も待つてゐて下さいました。

「雀の飛行機万歳、太郎さんも芳さんも万歳！」

ど、いつて下さいました。

二人は面白かつたことを、皆にお話いたしました。

そして雀には、

「ご苦勞さんでした。」

ど、いつて、ごほうびにお米を澤山蒔いてやりました。

四一、雀

ある日御父さんの雀と、お母さんの雀とで、屋根裏に巢をこしらへました。

その巢は、木の葉や柔かな色々のもので、こしらへてあります。そのまはりには、羽や
ら毛で柔かにしてありました。その巢が出来上ると、直ぐお母さんの雀が、卵を二つ
其中に生みました。

すると其後で、お父さんの雀もお母さんの雀も、其卵を抱いて、大事にしてゐました
お母さんの雀は、卵の上にはつたまゝで、幾日も幾日もちつとしてゐました。

暫くすると、二羽の小さい雀が卵の殻をわつて出て来ました。
赤ちやんの雀は、何も出来ず只口を大きく開けて、

「ピツピツ、お母さんピツピツ、お母さん。」

と、いふだけです。お父さんの雀は、毎日赤ちやんの雀の食物を探すため忙がしう
です。

その内に赤ちやんの雀も、大分大きくなつて、柔かな羽の着物を、からだにつけるや
うになつて来ましたので、そろそろ、飛ぶ稽古をさせやうと、お母さんの雀は、思つ
て居ました。

ある日、お父さんの雀と、お母さんの雀が御馳走をさがしに出かけました、その留守
中の事です。子雀達は妙な「バンザイ、バンザイ」といふ聲をさゝました。

「おや、あれは何だらう。」と、弟さんの雀がいひました。姉さんの雀が、

「お待ち、私がそつどのぞいて見るから。」といつて首を出して見ましたが、何もあ
りません、でも「バンザイバンザイ」といふ聲がたしかに聞えるので、姉さんの雀が
又首を出して見ましたが、何もありません。でも「バンザイ」といふ聲が、たしかに聞
えるので、姉さんの雀が、又首を前より少し出して見ますと、目がぐらくして
来ました。

「ピツピツ落ちますよ。」と弟さんの雀が、止めやうとしましたが、もう駄目でした。
姉さんの雀は、巢からころがり出て落ちました。

「ビツビツお母さん」と泣きました。上の巢の中でも弟さんの雀が

「ビツビツお母さん」

と、泣きました。お父さんの雀もお母さんの雀も、大分遠くへ行つてゐるので、中々聞えることはありません。姉さんの雀は地面を飛んでゐる泣いてゐると、その邊で遊んでゐた子供達は、澤山集つて来て、その中の一番強い武ちゃんといふ男の子が捕へました。武ちゃんは大喜びで、

「雀の赤ちゃんだよ。」と、いつて皆に見せ歩きました。

武ちゃんはお家で飼つて置かうと思つて、持つて歸りました、武ちゃんのお母さんは武ちゃんの両手の中で、

「ビツビツお母さん。」

と、泣いてゐる子雀を見て、哀れに思つて、武ちゃんと一緒に、雀の巢の處へ連れて行つて、巢の中へ入れてやりました、丁度雀のお父さんやお母さんや、弟さん等が、心配してゐるところでしたので、皆が大喜び、雀のお父さんもお母さんも、弟さんも、

「ビツビツ有難う、有難う。」

と武ちゃんや、武ちゃんのお母さんに、お禮をいひました。

四二、ピヨン太郎 (其の一)

お池の中の蛙のおうちに、「おたまじやくし」が生れました。

皆で大變に悦んで可愛がつて育てました。眞黒な小さな蝌蚪で、足も何もありません。たい、長い尾があつて、水の中を、チヨロ〜泳いでゐます。

お母さんの蛙は、毎日、お池から出て方々を、ピヨン〜と、跳んで歩きます。

そして、歸つて来てはお池の中へ、チャブーンと、とび込んで、スー、スー、スーと、泳ぎます。

そして、外で見た、いろ〜の面白いことを話して聞かせます。

蝌蚪は、自分も池の外へ出て、お母さんのやうに、ピヨン〜と、はねて見たくて

たまりません。

「お母さん、私も外へ行つてようござんすか。」

「いゝえ、いゝお前はまだ、なか／＼出られません、お母さんのやうに、足がちやんと、四つ出来なければだめ、ホーラ、一ツ、二ツ、三ツ、四ツあるでせう、お前も今に、かう云ふ風になりますから、それまで、お池で、金魚さんや、目高さんと遊んでお出でなさい。又お母さんが外から、おみやげを持って歸つてあげますからね。」

「えゝ」

それから、蝌蚪は、毎日お池の中で、元氣よく遊んで居ましたが、或る朝

「お母さん、こんなものが出て来ました、なかに。」

「あゝ、それは、後の足ですよ。よかつた事、足が出ましたね。」

「足なの、嬉しい、ちやもう外に出ても、よう御座いますか。」

「いゝえ、まだ前の足が二つ出なければ。」

「まあ、そら。」

それから、又おたまじやくしは、毎日お池の中で遊んで居りました。金魚が、

「おたまぢやくしさん、それどうしたの、なかに。」

「これね、後の足なんですよ、もう直ぐ前の足も出ますつて。」

「まあ、いゝのね、前の足が出れば、もうお池の外へも出られるのでせう。」

「えゝ、早く出て見たくてたまりません。お母さんの様に、ビヨン／＼と、そんなら、どんなに面白いでせう。」

「ほんとにね。」

暫くしてから、おたまじやくしが、

「お母さん、お母さん、これなかに………こゝが、こんなに高くなりましたよ。」

「おゝ、それは、今に前足が出るのですよ。」

「あゝ、嬉しい、これが前足になるのですか、あゝ嬉しい、そしたら外に、ビヨンビヨンと、跳んで行かれる、前足、早く出てくれ。／＼。」

前足が、だんくのびて、前と後と、ちやんと四つ揃ひました。」

「お母さん、一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、足が四ツになりました。もう、とべますか。」

「え、けふは、お母さんと、一緒に、こんで見せよう。さあ、いらつしやう。」

「嬉しいな、く。」

「さあ、ようござんすか。ビヨン。」

「さうです、さうです。も一つ、ビヨン。」

「ビヨン、」「ビヨンビヨン。」

「え、お上手く今度は、見て居ますから、一人でこんでござらんない

「ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン……オット、あぶない、ビヨン、」

「さうです。く、よくとべましたね、ぢやあ又明日にさせようね。」

「え、面白いのね、お母さん。」

「え、面白いでせう。それから又、だんく、遠くまで、とばれるやうになりま

す。毎日、お稽古させようね、それから、上手になるやうに、ビヨン太郎さんとお

名前をつけて上げませう。」

「ありがたう」「ビヨン太郎さん、よいお名前だなあ、ビヨン太郎さん。」

ビヨン太郎は、知らないで、「ビヨン太郎ビヨン太郎。」と云ひながら、ビヨンく、と、飛んで、お家へ、かへりましたので、大變に上手になりました。そして、遠いところまで、飛んでも、ちつとも、疲れなくなりました。

四三、ビヨン太郎 (其の二)

或る朝、ビヨン太郎のお母さんが、「蛙の新聞」を見てみました。

「おやく、ビヨン太郎さん、よい事がありますよ。」

「お母様、なかに、」

「あのね、今度の日曜日に、向ふの野原で、蛙の運動会がありますよ。」

「さう、お母様、僕も、つれて行つて頂戴。」

「え、行きませう、運動會は、それはくおもしろいのですよ。かけつこをした
り、高飛したり、綱引をしたり、まだ色々のことをします。」

「僕、駈つこに這入つても、ようございませうか。」

「え、ようございませうとも。」

「嬉しいな。」

それから、ピョン太郎は、毎日々々、朝から晩まで、ピョン、ピョン、くぐと駈つこ
の稽古を一生懸命にしました。そして大變よくかけられる様になりました。

とうとう、運動會の前の晩になりました。

いよく、あしたは運動會です。ピョン太郎は、嬉しくて、くぐたまりません。寝よ
うと思つても、寝られません。又しても、ピョン、くぐと駈つこの稽古をしてゐます
お母様は、おもしろいな、お辨當を作りながら、

「ピョン太郎さん、嬉しいでせう、あしたはしつかりおやりなさい。」

「え、僕、もう嬉しくてくぐ仕様がありません。」

「ぢや、今夜は、早く寝ませう。」

お母様も、ピョン太郎さんもぐつすり眠りました

朝になると上天氣、ピョン太郎は、はね起きました。

「やあ、嬉しいな、くぐ、運動會。」

それから、すつかり、お母様に、お支度をして戴きました。赤い運動シャツを着て、
赤い運動帽子をかぶつて、水筒をさげて、お辨當をせおつて、しつかりお支度が出来
ました。

「行つて参ります。」

「行つていらつしやいませ。」

お母様と、ピョン太郎と、二人で、ピョンくぐ、と、出かけました。だんくぐ、會場
に近づいて参りますと、樂隊の音が聞えます。

「プーカ、プーカ、ドンくぐ、ドンくぐ。」

ピョン太郎は、もうぢつとしては居られません。

ビヨンく、く、とかけ出しをした。
旗もきれいに飾つてあります。見物人も、そろそろと参ります。這入つて見ると、もう、ちやんと用意がしてあります。
旗、毬、綱、輪、杓子、皆揃つて居ます。
其の内に、花火が、ドーン、バーン、パチ、くくく。

「そろ、運動會が始まつた。」

一番はじめに皆の體操です。

雨蛙、土蛙、殿様蛙、青蛙、いば蛙、大きいのや、小さいのや、たくさん、それから、がま蛙が號令をかけてゐます。

「右の手を挙げ——挙げ！ 下せ、一、二、一、二、一、やめ！」

「左の手を挙げ——挙げ！ 下せ、一、二、一、二、一、やめ！」

「後足で立て——立て！ 歩け——歩け、一、二、一、二、一、やめ、坐れ！」

「跳躍運動、始め！ 一、二、一、二、一、二、一、二！」

「ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン。」
「やめ！ 右向け右！ 前へ進め、駆け足、一、二、一、二……」
其の次は綱引です、赤と白とに別れて、しつかり綱につかまりました。

「用意」「始め」

「オー、エス、オー、エス……」

「白勝つやうに、赤勝つやうに、」

「オー、エス、オー、エス……」

「ピリ、ピリ、ピリ、ピリ。赤萬歳——」

「萬歳！ 萬歳！」

「右向け右！ 駆け足、一、二、一、二……」

こんどは、愈々、駆けこです、皆、ラインの上に並びました。

ピヨン太郎は端から二番目に並びました。
體を、のり出して、

「用意、ドン」

「ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、皆、一生懸命に駆け出しました。」

ビヨン太郎も必死です。

皆もなかく、早いので、ビヨン太郎は、目をまん丸くして、口を結んで、汗びつしよりになつて、ビヨン、ビヨン、く、く、と、急ぎました。

一匹抜き、二匹抜き、三匹抜いて、うんと力を入れて、四五匹をぬき、もう一匹だと云ふので、ビヨン太郎、ありつたけの力を出して駆けました。

とうく、五匹目を抜いて、第一着になりました。

「ビヨン太郎君萬歳！ 萬歳！ 萬歳！」

ビヨン太郎は、嬉しくて、く、く、お母様のところへとんで歸りました。

お母さんも、大よろこびで、大變寝めて下さいました。それから、ビヨン太郎は、おいしいお辨當を戴いて、澤山、運動會を見てかへりました。

或る日、ビヨン太郎は、

「お母様、僕、これから向ふのお池へ、お魚釣りにいつてもようございますか。」

「え、いつていらつしやう。」

それから、お母様は、大きな三角の、おひすびを、三つ拵へて下さいました。そして、ちやんと、風呂敷に包んで、お辨當につけて下さいました。

ビヨン太郎は、赤い運動シャツを着て赤い運動帽子を被つて、お辨當を腰にさげて、物置きから出して来た、釣竿を擔いで、籠をもつて、

「行つて参ります。」

「うつてらつしやう、よく氣をおつけなさい。」

四四、ビヨン太郎 (其の三)

そして、おうちの方に、今日の面白かつた、お話を上げてました。

「え、今日は、お池中の魚を皆釣つてやらう、鯉も、鮒も、目高も、みんな釣つてやらう。」

「広い、く、お池へ参りました。」

「小さな波が、銀色に光つて居ます。」

「緑色の美しい蓮の葉が、まあるく、く、浮んで居ます。お魚が、時々ビヨイ、くと水の上に、はね上つて居ます。」

「ゐる、く、どれ釣りませう。」

「釣のさきに、餌をつけて、ポイと水の中に投げ込み、石の上に腰をかけて、ちつと、待つてゐます。」

「一向につれません。いくら待つてもお魚が、かゝりません。」

「かゝらないなあ、よし、ぢやあ、もつと、真中の方へいかう。」

「ピョン太郎は、池の中へ、ドブン、と、とび込んで、スー、スー、スー、と泳いで行つて、蓮の葉の上にのりました。」

「こゝなら、よく釣れるに違いない、どれ釣つて見ませう。」

「又、餌をつけて、ポイ、と水の中に、投げ込み、ちつと待つて居ます。」

「暫くすると、ピクリ、くと、糸を引きます。」

「そら、来た。」

「可愛い鮒がつかれました。」

「可愛い、鮒だ、鮒さん、よく来ましたね。」

「はりから、鮒をはづして籠の中に入れ、又餌をつけて、ポイと投げ込み、てゐます。」

「暫くすると、ピクリ、くと、糸を引きます。」

「そら来た。」

「そつと、上げて見ます。」

「と、「おや、く、今度は鯉の子、鯉さん、よく来ましたね。君はまだ小さいね。」はりから、はづして、又、籠に入れました。何匹も、何匹も、釣つてゐる内に、「ドーン。」

「おや、もう、ドンだ、せれ、おむすびを戴きませう。」
 蓮の葉のお舟の中で、お辨當を開きました。
 そして、籠の中の鮒や、鯉を、のどき込みながら、おいしそうに食べてしまひました
 それから、又、釣り始めました。

「おや、今度は、何だらう、こんなに長い魚がつかれた。あゝ、鰻か、随分、長いな
 あし。」

はりから、はづして、籠に入れました。

又、餌をつけて、ポイ、と投げ込みました。

投げ込んだと、思ふと、すぐ、ビクリ、く、と引きます。

「おや、く、何だか大變強く引くぞ、はてな、おや、これは重い、ドッコイショ
 あゝ、中々、重い。」

やつこの事で、つり上げましたら、大きな大きな鯉です。

「やあ、大きいぞ、大きいぞ、こんな大きいのは、今迄、釣つたことがない。籠に

入るかしらん、嬉しいな、く、おや、この鯉が何か云つてゐる、泣いてゐる。何
 ? 子供の鯉をかへしてくれ? ぢやあ、さつきの、小さな鯉が、お前のうちの子供な
 の、それを返してくれ?」

ピョン太郎は、しばらく大きい鯉と、小さい鯉を代りばんこに見てゐました。

「よし返して上げよう。」

小さな鯉を、つかみ出して、大きな鯉と、一緒に、池の中へ入れてやりました。

大きいのと、小さいのとは、嬉しさうに、鰭をうごかして、元氣よく、遠い方
 で、泳いで歸りました。

ピョン太郎は、見てゐましたが、

「ついでに、お前たちもみな、かへして上げませう。おうちへ、おかへりなさい。」

一匹づつ、つまみ出して、

「ホーラ、お歸り、さやうなら。」

「ホーラ、お前もおかへり、さやうなら。」

「ホーラ、お前もおかへり、さやうなら。」

「ホーラ、お前もおかへり、さやうなら。」

すつかり、池の中にかへしてやりました。

そして、ちいつと、泳いで行くのを見ておました。

「あゝ、面白かつた、僕も、かへりませう。」

ピョン太郎は、からつぽになつた籠を、ぶら／＼と、釣竿の先に、ぶら下げて、大きな聲で、うたひながら、歸りました。

「夕焼、こやけ、あした天氣に、なあれ。」

四五、赤い小袋

青々とした青葉の垂れた、藤棚の下に、小さな庭を敷いて、可愛い京人形やら、大きな西洋人形などを、並べた真中に、蝶子さんはきちんと座つて、可愛い手で御人形の

着物を着せたり、ぬがせたりして、しきりに莞爾として居ます。

不圖氣が付いて、よく聞くと、垣の外側で誰やら

「蝶子さん蝶子さん、もしもし、蝶子さん。」

と、呼んで居ます。蝶子さんは、

「あら。どなたか知らん、聞いたこともない聲だが。」

と、思ひながら、急いで御草履をはいて行つて、折戸を明けて見ると、見た事もない、きたない、なりをした自分と同じ年位の女の子が立つて居ました。

「まあ、あなた何所から来たの。」

と、尋ねても、女の子はだまつて居ます。

「どうしたの、何か御用でもあるの。」

と、云つても、やはり女の子は、だまつて少しづつ、後へ後へと行きます。蝶子さんは何だか気が／＼りなので、

「はんたらにどうしたの、何か御用でもあるの。」

ど、云ひつづ子を追つて行きます。

女の子は後をふりひきふりひき、手招きしながら、ずんずん行きます。蝶子さんも

「何なの、何なの。」

ど、尋ねながらずんずん行きます。

蝶子さんの御家の裏は広い野原で、其中程に一寸した林があります。その木蔭まで行くど、女の子は立ち止つて、急に泣き出しました。

「まあ、あなたどうしたの、お腹でも痛むのですか。何か悲しい事でも有るのですか。」

ど、やさしく、女の子の肩に手をかけて聴きますと、女の子は涙をふいて、

「私ね、お父様もお母様もありませんの、たつた一人の祖母さんと一緒に、あちらこちらを、旅して歩いてゐましたが、昨日の晩方お祖母様はどこへいらした事か、急に見えなくなつてしまひました、それで、私昨日夜通し歩き通して、さがしましたけれども、今に見當りませんの。お腹がすいてすいて、たまらないけれども、食

べるものもありませんの。」

ど、云つて又しくしくと、泣き出しました。

蝶子さんは可愛さうになつて来て、

「それでは、家まで行きませんか、そしたら御母様にお願ひして、御飯を食べさして上げるから。」

ど、言ひましたが、女の子は頭をふりながら、

「いいえ、もう一寸も歩けませんわ、目が廻る位苦しいの。」

ど言ひます。蝶子さんは、困つて、

「困つたね、あゝさうさう、これをお上り。」

ど言つてポケットからお菓子を出して女の子に渡しますと、女の子はさもうれしうに、

「まあ、それは有難う御座います。私こんなおいしいさうなお菓子は見た事もありません。」

と、にこにこしながら食べてしまひました。さうして、さもうれしうに、

「おかげ様で大層お腹がよくなりました、是から又お祖母様をさがしに参りませう」と、立ちかけました。

蝶子さんは、又女の子が一人きりで、お祖母さまをさがしに行くといふので、何だか可愛さうで可愛さうでたまりません。

「それでは、行つていらつしやい、そしてね又お腹がすいたら、又いらつしやいね。」

「ありがたうございます、ほんとに、あなたは情深いお嬢様ですこと。」
と叮嚀に挨拶して去りかけました。

蝶子さんは、何か思ひ出したやうに、

「あゝ、一寸待つて頂戴。」

と、後から追ひついて、

「あなたお人形がありますか。」

「いゝえ、私お人形なを抱いたこともありません。」

「まあさう私このお人形はね、京都の叔母様からいただいた一番可愛らしいのだけ
れど、あなたに上げます。」

と友仙縮緬の美しい着物を着た、可愛い京人形をさし出しました。
女の子は云ひ様のないうれしうな顔をして、

「まあまあ、あなたは何といふやさしい方でせう。ありがたう御座います。いただ
いて行きます。その代りに私もお禮にこの袋を上げます。」

と、きたない糸で拵へた小さい袋を、ふところから出しました。

「この袋は何を入れるものなの。」

と、聞きますと女の子は、

「この袋はね、不思議な袋で、何でもあなたがほしいと思ふものを口から出します
けれども少し氣短でね、あなたが嘘をいつたり、いたづらしたりすると、一寸の間
にどこへやらかくれてしまひますよ。そして一旦かくれるともう出て参りません
から。」

ど、いふなり女の子は、急いで蝶子さんの後へまはりました。「どうしたの。」と後をふり向くと、もう女の子の姿はそこらあたりには、見えませんでした。

蝶子さんは不思議に思ひながら、その袋を持つてお家へ歸りました。そしてためしに、

「私きれいな手毬がほしいわ。」

と、言ひますと急に小さい袋の口があいて、赤、黄、緑、紫、樺と五色の手まりがころころとこぼれ出しました。

お菓子がほしいといへば、御菓子が出るし、リボンがほしいといへば、美しいリボンが出ます。かうして何でもほしいと思ふものは、皆出るので、いろいろ珍らしい玩具にもあきあきしてしまいました。何かいいことは無いか知らんと考へて居ますと、お庭の木陰から、ペスが尾を振り振り出て來ました。蝶子さんがお椽側から下りるとペスはうれしさうに、蝶子さんの裾を引張つたり、下駄にまつはつたりして、ふざけます。それを見てゐた蝶子さんは急に思ひついた様に、ふところから不思議な袋を出して、ペスの頭にかぶせました。ペスは袋を取らうとし切りに頭を左右にふり、手足をもち

きながら、歩き廻つて居るうちに、お池の中にころげこみました。びつくりして、蝶子さんが走つて、お池の端へ行つた時には、ペスはもう向ふ側の岸に上つて、しきりに身振ひしながら足をなめて居ました。しかし頭には、もう袋をかぶつてゐません。お池の水の上にも浮いて居ません。底の砂地まですき通つて見える程、澄みきつたお水の中にもありません。

「あら。あの袋はどこへ行つたのだらう。」

と言ひかけて、急に女の子の言つた、

「この袋は氣短であなだが、うそを言つたり、いたづらしたりすると、どこへやらかくれてしまひます、そして一旦かくれると、もう出て參りませんよ。」

といふのを思ひ出して、俄に困つた顔をしました。そしてお家へ行つて見ると、そこらあたりに並べてあつた袋から出た珍らしい玩具は、何もありません。何一つ何處へ行つたのか、影も形もありません。

蝶子さんは、ペスに悪戯した事のわるかつたのを悔いると、急に大聲を擧げて泣き出

しました。

「まわ蝶子さん、どうしたのです、何をそんなに泣いてゐるの。」
 と、いふやさしいお母様のお聲に、ふつと目がさめると、そよそよと、藤の葉づれの音を耳に、庭の上に横はり片手に可愛い京人形を抱き、片手にお母様に拵へていただいた、真赤な糸の小袋を持つたま、眠つて居たのでした。

四六、一夜の宿

昔ある神様がお一人で、穢い風采をして、世界中をお廻りになりました。
 或日朝から寒い風が吹き、氷がはつて、雪が澤山降つて来て、そこら一面真白で、誰一人出遇ふことの無い淋しい夕方、暮れるまでに何處かで泊めて貰はうと思つて、歩いて居られましたら、丁度そこに大きな美しい家と、小さい穢い家とが有りました。
 神様は小さい家は狭くて氣の毒であると思はれて、大きな家の戸を叩いて、

「旅のものです。どうか今夜泊めて下さい。」

とお頼みになりますと、その家のをぢさんが、窓口から見つて、穢い人であると思ふて「泊めることは出来ません。」

といつて戸を明けて呉れませんでした。そこで今度は、小さい家の戸を叩いて、

「旅のものです。どうか泊めて下さい。」

とお頼みになりました。

この家にはお父様と、お母様と、一郎さんといふ可愛らしい子供と、三人暮でありました。

お父様は直に戸を開けて、

「サア〜お入りなさい、この様な穢い家でもおいとひ無くばお泊り下さい。」
 と言ひましたので、神様は喜んで、直にお這入りになりました。

お母様は、

「さぞ寒かつたでせう。」と火鉢に火を入れたり、「お腹が空いたでせう。」

と言つて、夕御飯を持つて來たりしました。

一郎さんは、ニコ／＼として甲斐々々しうお母様のお手傳をして居ました。

神様は親切な人であると大層お喜びになつて、お芋やら、お豆腐やらのおかずで、御飯を旨しい／＼と言はれて、澤山およばれになりました。

だん／＼寝る時分になりますと、お客様には蒲團を敷いて、寝させました。するともう蒲團が一枚もありませんので、三人は藁をしいて、蒲團の代りにして寝ました。

翌朝三人は早うから起きて、御飯を焚いて神様がお起きになると直ぐに、

「サア／＼、お上り下さい。」といつて御飯を上げました。

神様は喜んで、又およばれになりました。

「よう泊めて下さいました。」とお禮をいはれました。その時神様は

「私は穢い風采をしてゐるが、實は神である。お前達は誠に親切者であるから、三

つの願を叶へて上げやう、さあお言ひなさい。」

と仰言いますと、三人は、

「マア／＼、さうでしたか。」と言ひまして、

「それでは厚かましうは御座いますが、私共皆、體が達者で働けますやう、其上一

郎が大きくなつて立派な軍人になれますやう此の二つの願を叶へていたゞきました

ら其他は何もお願は御座いませぬ。」と申しました。

神様は

「その上、新しい家があつてはせうか。」

と言はれますと、

「ハイさうなれば此上嬉しいことは御座いませぬ。」と答へました。

神様は見ると、古い家を新しい立派な家に造りかへて、其上蒲團やら、茶碗やら、種々の道具まで澤山下さいました。

そのうちに大きな家の人が、朝寝をして、目を醒して、隣の家を見ますと、今迄な

つた立派な家が、俄かに建つてありますので、吃驚して其家に尋ねて行きましたら、

昨夜のお客様は神様であつて、お泊め申した御褒美に、此様に立派な家に作り替へて

いただいたのです。と聞きまして、

「そんな結構な事があるのなら、私の家でお泊めするので有つたのに。」
と大層残念に思ひまして、慾張りの人ですから、直に馬に乗つて神様を探しに追ひかけました。

ところが餘り急いだので、馬から落ちて大怪我をしまして、早くお医者さんの治療を受けねばなりませんので、泣く泣く家に歸へつて來ました。

それから身體が段々弱くなつて、思ふやうに働けず、可愛相に、貧乏になりました。

四七、太郎さんの鯛屋

毎日、田舎から、大阪の間屋へ、鯛を賣りに來るお爺さんがありました。今朝も早うから、大きい桶に鯛を入れて、其れを天秤棒で擔つて、ヨツシヨツシと歩いて來ました。

丁度電車の交叉點まで來ますと、あつちからもこつちからも、カン／＼と、電車が勢よく走つて來ました。お爺さんはいつも此處まで來ますと、よく氣をつけて、怪我をせぬ様に渡つてゐましたが、今日は折り悪く後から、ボウ／＼と大きな音をさせて、自動車走つて來ました。お爺さんは、

「ヤア……コレハ大變。」

と、言つて、重い荷を心配しながら渡つてゐますと、また向ふから自動車が、リンリんと走つて來ましたので、お爺さんはよけようと思つて天秤棒を動かしました。すると其拍手に桶の綱がブツと切れしました。

ヤア大變／＼鯛がピン／＼はね上り道は鯛でいつぱいになりました。

鯛はピチ／＼と飛びまはり、砂だらけになつてしまひましたので、お爺さんは喫驚仰天、あわてて汗だらけになり、一生懸命拾つて居りました。

道の人達はよつて來て、いつぱいになりましたが、誰も拾つてあげる人は有りません。丁度其處へ太郎さんは今日も幼稚園に行かうと思つて、白いエプロンをして來ました。

が、あまり澤山人が居るので何かと思つて、其人の中に入つて見ますと鱧は砂だらけになつてはねて居ます、そしてお爺さんは一生懸命拾つてゐます。
太郎さんは、

「お爺さん僕も拾つてあげやう。」

と、言ひますと、お爺さんは喜んで、

「坊ちゃんどうぞ拾つて下さい。」

とたのみましたので、太郎さんは拾ひました。

さつきから傍で見居る澤山人達は氣の毒な可愛さうなお爺さんに、拾つてあげたいと思つてゐましたが、なんだかきまりがわるくて、誰もよう拾ひませんでした、太郎さんの親切に感心して、見てゐる澤山人達は、皆一緒になつて鱧を拾ふ様になりました。

其れでお爺さんは一匹も残さず鱧やへ鱧を持つて行くことが出来ました。

お爺さんは大變喜んで、何べんもくも太郎さんにお禮を云ひ、また皆の人達にも町



噂に御辭儀をして御禮を云ひました。

四八、お猿の火けし

或やおやしきにお猿が飼はれてをりました。

或時お屋敷が火事となりましたので、お猿は綱を切つて逃げ出しました。

そしてお猿はすぐ樹に昇りましてお屋敷の火事を見て居ますと、火消が「ポンプ」で水をかけて居りました。

それからお猿は山へ歸りましたが、或時狐の巢が焼けました。

するとお猿は水鐵砲を持ち出して。いつか見ました火けしの模擬をしました。

それで見ごとに火を消しましたので、狐は大よろこびでチキチンコンコンと
はやしたてて、狐踊りをしましてお猿に見せてお禮をいひました。

四九、寶の卵

或所に政吉と言ふ子供がありました。

政吉は小さい時から、お父さんがありませんので、田舎の大きなお百姓の家に奉公して、晝は田や畠を耕し、夜は人の寝た後迄も、本を讀んだり、繪を描いたりして勉強します。朝は早く起きて門を掃いて水を撒き、馬や牛の小屋も綺麗に掃除して、青い美味相な草を茹つて来て入れてやりますから、馬や牛は政吉が大好きで、政吉が側を通りますと、手をなめたり頭をすりつけたりして喜びます。

それで家の人からは政吉政吉と言つて、何時も可愛がられて居りました。或時政吉は主人に向ひまして、

「旦那様、私も永い間御奉公を致しまして、もう大分年も大きくなりましたから、國へ歸つてお母さんと一緒に、お百姓をしたいと思ひますから、どうぞ今日からお暇を戴きたらう御座います。」

とお願ひ申しますと、主人も平常から大氣に入りの政吉ですから、今直に暇をやるのは惜しうございませすけれども、お母さんの所へ歸ると言ふのですから、無理に止める事も出来ません。

「さうか。それでは暇をやるから、地面でも買つて、お母さんと氣樂に暮しなさい。是は永い間働いて蓄めてあつたお給金です。」

と言つてお金を澤山戴きました。

政吉はお禮を言つて、主人の家を出かけますと、主人は

「政吉一寸お待ち。お前は永くよく働いて呉れましたから、御褒美にこれ一つ上げよう。大切に持つてお歸り。家に歸るまでは決して途中であけてはなりません。」

と言つて、小さな卵を一つ呉れました。

政吉はそれを貰ひまして主人の家を出しましたが、見ると小さな卵ですのに、大層重うございますから、どうも不思議で堪りません。

「全體是は何の卵だらう。」途中であけてはならん。」と言はれたが、さう言はれると

何だか早くあけて見たくて堪らない。構ふものか、どうせ私が貰つて来たのだから一寸開けて見よう。」

と勝手な考をして、道端の石に腰をかけて、どうく卵を途中で割りました。すると其中から、牛や豚や馬や、又犬や猫や雞杯の畜類が澤山飛び出して、

「ピン〜モウ〜、ワン〜、ニャー〜、コケツコツコウ。」

と八方へ逃げて行きますから、政吉は吃驚して大急ぎで元の卵へ入れやうとしました。が、どうしてこんな澤山な畜類を小さな卵の中に入れるわざどころか、捕へる事さへ出来ませんから、

「あゝこれは大變な事をしてしまつた。これだから家へ歸る迄は決して開けるなど言はれたのだ。ほんたうにどうしたらよいだらう。」

と大困りして泣き出し相な聲で、

「誰か来て助けて下さい。」

と大聲で呼び乍ら、山道を彼方此方と追ひかけて居りますと、向ふの方の山道から、

白い美しい鬚のある綺麗なお爺さんが出て来られ、ニッコと笑つて、

「政吉よ、主人の言ひ付けを聞かないから、そんなに困るのだ。今私が元の卵の中へ追ひ込んで上げよう、此後は言ひ付けに背いてはなりませんよ。」

と言つて、銀の笛をピーとお吹きなさいました。

それを聞くと畜類はみんな温順しくなつて、今迄散々に逃げ廻つて居たのが、一時に飛んで歸へつて、又元の卵の中へ小さくなつて、這入つてしまひました。

お爺さんは卵の割目を自分の手で、よくお撫でになりますと、すつかり元の通りに小さい重い卵になりました。

政吉は大喜びで、

「お爺さんどうも有り難う御座いました。是から後は決して言ひ付けを背きません。私が悪うございました。御恩は忘れません。」

とお禮をいつて頭を上げると、お爺さんはさも嬉しうにお笑ひになつて、見る中にふらりと天高く舞ひ上り、お姿は見えなくなりました。

欠

五〇、きつつき鳥

或る田舎に、パン焼お婆さんがありました。

或日一人の坊さんが、そこへ参りました。

「もしくお婆さん、どうぞ後生ですから、そのパン一つ下さいませんか、お腹が空いてどうにも斯うにも歩けません。」

といひました。

「ちよつとお待ち下さい。今に焼けますから。」

とお婆さんは氣の無い返事をして、相變らずパンを焼いて居りました。

「今に呉れるだらう。」「今度こそ呉れるだらう。」

と坊さんが待つても待つても、いつかなお婆様は呉れそうな様子も見えませんが、とうく我慢がしきれなくなつて、

「お婆さん。済みませんがまだ頂けませんか。」

といひました。

お婆さんは振り向きもしないで、

「あなたにはちつと大き過ぎますから、もうちつとお待ちなさい。」
と又さつさと焼いてはしまひ、焼いてはしまひして居りました。

「まだですか。小さくても構ひませんから、お早く。」

「はい今に上げるといふぢやありませんか、うるさいお坊さんですね。」

お婆さんは焼いても焼いても、いよ／＼お坊さんにやるとなると、惜しくて仕様がありません。もう少し小さいもの小さいものと焼いては惜しくて、しまひしまつたあけく、今度はパン屑でおせんべいの様な薄つぺらな、お菓子焼きました。

それでも惜しくて堪りません。

お坊さんは、もう堪りません。

「そんな小つげけな、お菓子でも惜しいのですか。もう私は貰ひませんが、お婆さん、あなたはそんなにケチ／＼しちや駄目ですよ。あなたのやうな、けちん坊は鳥

にでもおなりなさい。」

と少しムツとして言ひました。

すると見る間にお婆さんの顔には嘴が出来て、身體には翼が生えて鳥になつてしまひました。

「あれ！ あれ！」

と坊さんが驚いて、大聲を出しますと、その聲に吃驚して、お婆さんの鳥は、パン焼に使つた竈の煙突から、

「パタ／＼／＼」

と羽ばたきをして、逃げて行つてしまひました。

「お婆さん、お婆さん、餘り可愛想な事をしてしまつた、お婆さん。」

と坊さんはおろ／＼聲で呼び返しましたが、もうお婆さんの鳥は影も形も見せませんでした。

今山奥の大きい木の幹に止まつて、コッコッコと、朝から晩まで木の皮を、嘴でつ

ついでには小蟲を取つて食べるきつつきといふ鳥が居りませう。
これは彼のけちん坊婆さんの、なれの果であるさうでございます。
此のお話を知つてゐる村のお母さん達はコッコツと、きつつきの蟲を取る聲がしま
すと、

坊や、お聴きよ。きつつきが、

あれまた、コッコツ、ついてゐる、

あんまりけちな 事したら、

つい食べ物が、木の中に、

みんな隠れて、出ないので、

あれ彼の通り、コッコツと、

掘つて居ります。まあお聴き。

とよく守歌を、諺つて下さつたさうで御座います。

五一、日の丸の旗

お正月に、私があるなじみのお家へ行きましたら、門に大きな国旗が立て、ありまし
た。其の下で、忠雄さんが、林檎の様なお顔で、元氣よく、遊んで居ましたが、私を
見ると、すぐ、

「伯母さん、新年お目出たう、僕は今年八ツになりました。頭が国旗にどい様
大きくなつたでせう。」と云ひましたので、

「おや、まあ、ほんたうに、脊も高く、よく肥えて、強さうな、お身體におなりで
したこと、私は、びつくりしましたよ、お正月で、お嬉しいこととせう。」

と云ひました。そして、お玄關の方へ行つて、

「御免下さい。」と申しますと、

「はい。」と、すなはに、妹の愛子さんが出て、

「新年お目出たうでございます。私は、今年六ツになりました。」とニコニコ顔、其處

へ、弟の勇さんも、走り出て、

「僕、是丈になつて、兄ちゃんだ。」と、片手の指を皆、開いて、大威張です、私は嬉しくて、可愛くて耐りませんから、

「今年も、皆さん、お丈夫で、そして良い子になりませうね。」と申しましたら、お三人共、

「きつと、良い子になりますよ。」と、可愛いお口から言はれました。其の時、お母さんが出て来られて、

「さあ、どうぞ、お上り下さい。」と仰いますから、お座敷へ通りまして、お父さんや、お母さんに、御挨拶をして、

「お三人の、お子さんが、皆お丈夫で、何よりお目出たうございます。」と申しましたら、

「まだ一度も、病氣に罹つた子はありません。又怪我をした事もないのです。」とお父さんも、お母さんも、大喜びでした。

其の傍で、勇さんは、お友達の實さんと、元氣よく、大正獨樂を、まはして、仲よく遊んで居ました。

愛子さんは、お廊下でお隣の操さんと、毬つきあそびをして、面白さうに笑つてゐます。

其の間に、忠雄さんは門の外で、お向ひの義雄さんといふ、仲よしのお友達と、風を揚げだんく糸を延して居ましたが、よい加減に、風が吹いて居りましたので、大層甘く揚りました。

すると何處からか「ブーン」と、プロペラの音が聞えて来ましたので、二人が聲を揃へて、大きな聲で、

「あれ飛行機が飛んで来る、

あんなに早く飛んで来る、

もうあれあそこに飛んで来た。

今すぐ見ないとかくれませす。」

と、勢よく歌ひ、そして、

「奴風よ、「ブンブン」うなつて、高く昇り飛行機のお友達になれ。」と叫びました。私は其の聲を聞きまして、デット、して居られませんので、すぐ外へ出て見ました。暫くする間に、風が大變きつうなつて、飛行機は見えなくなりました。風も風で、獨樂の様にまはされ幾度も宙返りをしたからたまりません。どうとう、其の糸が、國旗に、ぐるぐると巻きつきました。それで、二人は有丈けの力を出して、風をおろさうとしましたが、中々、糸がはどけません。

其の間に、雪がちらちら降つて來ますし、風はだんぐりはげしく吹いて來ましたので國旗も一所について昇りさうに見えませんでした。

其の時、忠雄さんは、國旗の棒を確と、つかまへながら、ふと考へつきました、

「さうだ、さうだ、日の丸の旗は、大事な、大事な、日本の國旗だから、強い子供は、之をよく守るのだと幼稚園の先生から、お話を聞いたね義雄さん、早く、鉄を持つて來て頂戴。」

と、頼みますと、すぐお家へ歸つて持つて來ましたので、忠雄さんは、手元から、風の緒をふつつりと切りました。

すると、風はだんだん高くなり、天迄昇つて行きました。

其の時二人は、

「まあ、よかつたね、風は、僕等の云ふ通り、飛行機のお友達になつて、何處まで飛んで行つたか知れないね、奴さん、大威張りだらう、僕等も風に乗つて、行つたらよかつた、さうしたら持つて歸れるのに、」

と、義雄さんが云ひましたら、忠雄さんは、

「君怪我をすることを、いけないよ、風はいくらでも買へるおもちやぢやないか、それよりか、國旗の方がどれだけ大事だか分らないよ。」

と、云ひました、又、二人で、

「朝日にかゝやく日の丸の、ひらめく御旗の聲で、元氣にみなみなよく進み、きつと良い子になりませう。」

と、面白く歌ひました。

愛子さんも、操さんも、勇さんも、實さんも、出て来て雪がちらちら、お顔にかゝつても、少しも寒さうにせず皆で、手毬歌を、

「二ツ日の丸、日本の旗よ、

二ツふとつて、つよい子は良い子、

三ツ見たこと話す子は良い子、

四ツよく聞く覚えの良い子、

五ツいつでもすなはな良い子、

六ツ無理なぞ云はぬ子は良い子、

七ツ仲よく遊ぶ子は良い子、

八ツやかましく云はぬ子は良い子、

九ツ今年も丈夫で良い子、

十で尊い日本の旗を、

守る子供は元気で強い、

強い我等が守りませう、守りませう。」

と、よく揃うて、お上手にうたひました。

すると何時の間にか小犬のベスマでも走り出て、雪の降るのを嬉し気に、かけまはつてゐました。

其處へ、正孝さんと云ふ、お友達か、

「忠雄さんの奴さんが歸つて来ましたよ。」

と、凧を拾つて来て下さいましたので、皆々、大喜びでした。

それから私も皆さんに、

「左様なら」と、御挨拶をして歸りました。

五二、泣き虫の國

或處に太郎といふ子供がありました。

誠によう泣く子供で、朝起ると晩寝る迄泣き通して居ました。

朝顔を洗ふのが「つめたい。」と、言つては泣き、

「お菓子が欲しい。」と、言つては泣き、

「犬が吠へた。」と言つては泣き、

「お友達が、からだに觸つた。」と、言つては泣き、

一日に何度となく大方泣き暮して居ました。

お父さんや、お母さんは大變心配せられまして、どうしたら太郎は泣かない様になるであらうかと、いろく思案したり、外の人にも相談したりして居られました。

お父さんは「皆が甘やかすからである。」

と、思はれて、

「今度泣いたら放つて置いてごらん。」

と、皆に言ひつけられました。

或日お母さんが一寸他所へ用事に行かれる時、着物を着換へて居られました。其處へ太郎さんがやつて来て、

「お母さん何方へ行くの、僕も連れて行つて下さい。」

と、泣き聲で言ひました。

いつもならば可愛想に思つて連れてゆかれるのでありますが、お父さんの言ひつけがあるのです。

「今日はお母さんの御用ですから、あなたは連れて行く事は出来ません、大人しく留守をしておいで下さい。」

と、言ひすてて、お母さんは出て行かれました。

太郎さんは、

「僕も行きたい僕も行きたい。」

と、涙を流して大きな聲で泣いて居ました。

何時も女中のお梅や、お花が、何とか言つて呉れますのに、今日はお梅もお花も主人に言ひつけられてゐるので、來ても呉れず慰めても呉れませんでした。

太郎さんは仕方なしに、お室に只一人泣いて居ました。餘り泣きましたので前掛も疊も涙と鼻汁とでべた／＼になりました。

太郎さんは泣きながら、不圖其涙を見ますと、其涙の中から可愛らしい顔の赤い、お尻の赤い、皆さんの好きなものが現れて、太郎さんの側に寄つて來ました。

猿「太郎さん何故そんなに泣くのですか。」

太「お母さんがアーン／＼／＼。」

猿「泣くのはおやめなさい、私が飛行機に乗せて面白い處へ連れて行つてあげます。」

と、言つて太郎さんの手を引いて、飛行機に乗せました。

躑躅飛行機のプロペラーが「ブーン。」と、唸り出して高い空に飛んで行きました。

何時の間にやら綺麗な花が澤山咲いて居る廣い／＼野原に來ました。

太郎さんは、泣くのを止めて其美しい野原を猿と一所に楽しく飛んで行きますと、向ふの方に大きな門が見えて來ました。

太「ヤア彼處は何と云ふ處ですか。」

猿「あれは泣き蟲の國です、彼處へ連れて行つてあげませう。」

と、言つて太郎さんを門の中に入れました。

太郎さんは門の内に這入つた時、お猿の姿が何所かに消えてしまひました。

太郎さんはそろ／＼悲しくなつて、泣き乍ら歩いて居ると、其國の人はどの人もどの人も皆泣き乍ら道を往來してゐました。

流石の太郎さんも餘りに皆が泣いて居るので自分を忘れて其人達の泣くのを眺めてゐました。

男も女も子供も老人も皆泣いて居るので、道は涙で、雨降りのおこの様に濡れてありました。

太郎さんは不思議に思つてあちら、こちらを見乍ら歩いて行くと、多勢の子供等が、鬼ゴッコをして居ました。

「鬼さんこちら手の鳴る方へ。」

と、泣き乍ら子供は手を拍つて居ます。

目隠しせられた鬼も、ぼろ／＼涙を流して追かけてゐました。

また毬投げをしたり旗取りをしたりしてゐる、その子供も皆泣いてゐます。

また行きますと或る大きな家で、大きな男の子が、

「御飯が遅い。」と、言つては泣き、

「お汗をこぼした。」と、言つては泣き、

「お茶をこぼした。」と、言つては泣き、

「御飯が齒にはさまつた。」

と、言つて泣いてゐました。

大きなからだで餘りよくなきますので、太郎さんは、

「アア泣き蟲だな、泣いてばかりゐる可笑しい。アハ、ハ、ハ、ハ。」

と、覺へず大聲で笑ひました。

すると、ひよつこり先刻の猿が出て來ました。

猿「どうです、太郎さんよく泣きませう、丁度太郎さんの様ですね。」

と、笑ひました。

太「僕はもう泣きませんよ、泣くのは見つともないです、僕は日本國の太郎です。こんな泣き蟲の國の人ではありません。」

と大威張りに威張つて邊りを見ると、猿も泣き蟲の國も消えてしまひました。

五三、桃 太郎

桃よ桃よ流れの川で洗濯すればおべべが濡れる。「遊戯手のみにて」お婆さんはチャブ／＼と川でお洗濯をして居りますと向ふの方から、何か赤い丸いものがドンブラ

コ／＼ドンプラコッコ、スコッコ、ドンプラ／＼ドンプラコと流れて來ます。

婆「ヤーこれはみごとな桃の實ぢや、どうかこつちへ流れて來てくれるとよいがな
ー、大きな桃こつちこい、おいしい桃こつちこい。」

と、申しますと、桃はドンプラ／＼と、お婆さんの足元の處まで來ました。

婆「や、どつこいしよ。」と拾い上げようとしますと、なか／＼重い。

誰か來るとよいがなーと、思つて居ますと、向ふの山道をお爺さんが木を背負つて、
ヨツチ／＼と、歸つて來ますから、婆「おーい、おーい、お爺さん」と呼びますと、向
ふからも「おーい、おーい」と、返事して、まもなくお婆さんへ參りました。

お爺さんと、お婆さんは、二人でやつこの事で桃を拾つて御家へ歸りまして、庖刀で
桃を割らうとしましたら何處からか「まつて下さい、まつて下さい」と、云ふ可愛ら
しい元氣のよい聲がします

はてな、誰だらう、と、あたりを見ても誰も居りません。その内に側の桃の實がだん
／＼ふくれて來て、ばーんといふ大きな音を立て、割れました。其中から飛び出した

ものは、丈夫な立派な男子の子供でした。

お爺さんと、お婆さんは、喫驚したのしなないので、倒れさうになりました。そして喜
ぶの喜ばぬのと云つて、それは／＼天に昇る様でした。

毎日可愛がつて育て、居ました。どうもお名前がないと大變に困るから、一つなにか
名前をつけませう、丁度桃の中から出たのだから、桃太郎としました。

この桃太郎は、近所でも、皆さんに可愛がられ、褒められて、桃太郎さん、桃太郎さ
んと、云はれて居ます。

遊ぶことは兵隊事でも、角力でも、駈つこでもなんでもそれは上手でした。
或日のこと、お爺さんと、お婆さんの前に參りまして、

桃「お爺さん、お婆さん、此頃鬼が島と云ふ處から悪者が來て、子供や老人をいぢ
めたり、寶物を取つたりして亂暴をしますから、私は一つ其悪者を征伐に行きたう思
ひます、どうかやつて下さい。」と、頼みましたけれども、お爺さんや、お婆さんは、
「それは危い、あつちは大人、お前は子供、とても戦争は出來ませんと申します。」

桃「いいえ、大丈夫です、決して負けはしません。」
 爺婆「それはどにいふのなら、いらつしやい。」

桃「それではどうか行かして下さい、そしてお願いには黍團子をこしらへて下さい」
 そこで、お爺さんと、お婆さんが黍團子を拵へる仕度をして居りますと、このお話を聞いた、近所の人達が多勢来て、「桃太郎さん勝つて下さい」と、云ひます。
 そして皆で黍團子をつけて上げました。(ここで餅撞きのきやりの歌を歌ひ餅搗きをやるもよろし) 桃太郎さんのお支度も出来ましたので、皆に送られて、鬼が島へ出發しました。

桃太郎さんは只獨り山を越し、川を渡つて、淋しい道をここと歩いて居りますと、背後でワン／＼／＼。

犬「もしもし桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけたのは何ですか。」

桃「日本一の黍團子ぢや。」

犬「一つ下さい、お伴をいたします。」犬が家來になりました。又背後からキャツ

／＼。猿がやつて来て、又家來にしてもらひました。

次には、雉が来て、どう／＼三つとも家來になり、勇しく鬼が島の向ふまで來ました。

これから船に乗つて、犬が、船頭さん、船歌もなか／＼上手

「せんどやまんどお船やぎつちららこ、ぎつちららぎつちららこげば鬼が島は近いな、い

ごこげこげや。」

どう／＼鬼が島に参りました。

静に船から下りまして、鬼の城へ来て見ると、仲々入れません、さあこまつた、桃太郎さんも大變困つて考へて居りますと、雉が、私が先へ入りませうと、飛行機のように上からすゝと飛んで入りました。

中から門をすゝと開けて、桃太郎軍を入れました。

桃太郎は、大聲で「突貫進め」と、號令をかけました。

「わーっ」といつて一同進みました。

鬼は喫驚して、うろくして、逃場を失つて、困つて居る所を、皆つかまへて、降参させました。

それから鬼共は「降参した印に、寶物を桃太郎さまに差上げます。」と、申しました。そこで桃太郎軍は、寶物を、澤山お船に積んで歸つて來ました。

お宅では、お爺さんやお婆さんや、近所の人達は、大變心配して居た處ですから、桃太郎さんが歸つてきたといふことを聞いて、大喜びして、濱へ皆出迎へました。

桃太郎の船がだんく濱に近寄り、皆が丈夫で歸つたのがわかつたものですから、皆大喜び、濱へ着くと、桃太郎さんは、一番さきに、お爺さん、お婆さんの處へ來て、

桃「お爺さん、お婆さん、只今歸りました。」
爺婆「お、よく歸つて來た、めでたい。」

桃「皆さんありがたう。」

一同「桃太郎さん万歳、万歳、万々歳。」
と、皆が両手を舉げていはひました。

五四、春雄さんの飛行機

春雄さんは大そう元氣のよい子供でした。飛行機が一番好きで玩具の飛行機を買つて載いて、いつも喜んで居ました。

春雄さんのお家のそばには、廣い廣い、野原がありました。そこへ春雄さんの大好きな飛行機が時々來ますので、それを見る度に、春雄さんは小踊して喜んでゐました。又春雄さんはお月様が大好きでしたから、

「僕は大人になつたら、あの好きな飛行機に乗つて、あの好きなお月様の處へ行かう。其時には白よ。(犬の名)お前もつれていつて上げるよ。」

といつて早く大きくなるのを、喜んで居ました。

或日のこと、春雄さんは、白と椽先で遊んで居ますと、何か、空の方で、ブーブーといふ音がします。

春雄さんも、白もびつくりして、空を見上げると、それはそれは立派な飛行機が、下

りてきます。

春雄さんは、思はず知らず兩手を舉げて、

「萬歳。」

といひました。間もなく、其飛行機は春雄さんのお家のそばの野原へ、下りましたので、春雄さんも、白もそこへ飛んでゆきました。すると其飛行機の中から、一人の小父さんが出て来て、

「元氣のよい、春雄さんといふのは、あなたですか。私は月の世界から、お迎ひに來ました。さあ、お乗りなさい。あなたの好きな月の御殿へ、つれて行つてあげませう。」と申されました。

春雄さんは、うれしくて、うれしくてたまりません。直にお父様や、お母様に願つて白と一緒に、小父様の飛行機に乗りました。小父様が「ハンドル」を廻はされると「ブーン」といふ音といつしよに、飛行機はだんだん高くのぼつて行きます。もう人は蟻程にしか見えません、春雄さんのお家も、そばの野原も、天王寺の五重の塔も、みんな

な小さくなつて來ました。小さい鳥や大きな鳥が飛行機のそばを、あちらこちらと飛んで行きます。その内に海に出ました。大きな大きな軍艦や、汽船がまるで、此處の幼稚園のお池に浮した笹舟程にしか見えません。

春雄さんは大得意になつて、方々を見廻はしてゐます。しばらくすると、下の方のものが何も見えなくなりました。それもその筈で雲の中へはいつたのでした。

ちやうど煙のやうな、もやもやしたものに包まれたのです。春雄さんは何だか、眠くて眠くてたまりませんので、白を抱いたまゝ、眠つてしまひました。

「春雄さん春雄さん。」

と呼ぶ聲にふと目をさますと、小父さんはにこにこして、

「さあ、月の御殿が見え出ししましたよ。」

といはれました。びつくりして見ますと、まあ、何といふきれいな御殿でせう。まるで浦島さんの行つた龍宮の様です。あつけにとられて、見てゐる内に早大きな大きな御門の前に來ました。

澤山の兎さんは、門の前へきれいなならんでゐます。飛行機から下りた春雄さんを見るとき、其兎さん達は、

「春雄さんよくいらつしやいました。あなたのお出でを、今か今かとお待ちいたしてゐました。さあさあお通りなさい。」とらつて一匹の兎さんは、ビヨンビヨンと飛んで、先に立つて行きます。

其後から小父さんと、春雄さんと、白とがついて行きますと、廣い玄關や、いくつもの廣い室を通つて、長い長い廊下に出ました。その兩側は廣い廣いお庭で、右の方を見ると、ひびひやまひや金魚が、元氣よく楽しさうにおよいで居ます。噴水もあれば橋もかゝつてゐます。お池の向ふには、お山もあります、左の方を見ると、赤や、紫や、白い花の咲き亂れてゐる花壇があります。

ブランコも、スベリ臺もあつて、春雄さんは早く下りて遊びたうなつて、もちもちしてゐます。廊下の向ふの方を、ふと見ると、優しいうれしさうなお顔をした、お月様が、きれいなテーブルのそばに腰をかけて、手招きをしていらつしやいます。いそい

で行つて先づお月様にお目にかゝりました。

お月様は春雄さんの來たのを、大そう喜びになつて、月の世界のお話を色々して下さいます。其内に兎さん達は、自分のついたお餅や色々の御馳走を運んで下さいました。其御馳走をいただきながら、春雄さんは、飛行機に乗つて來た道の面白かつたことを話したり、幼稚園でならつた、「お月様えらいな……」のお歌をうたつたり、お遊戯をしてお目にかけてりしました。するとお月様は、

「春雄さん、あなたは桃太郎さんの様に元氣がよいね、さうして、中々はつきりしたお言葉だね。」

といつて大そうおほめになりました。

お土産には可愛らしい小兎をいただいて、又飛行機に乗つて白と一緒に下りて來ますと、家が澤山見え出した時、春雄さんのお家のそばの野原には、澤山の人が集つてゐて、誰も誰も両手を上げたり、ハンカチを振つて、

「萬歳々々、々々」

と春雄さんを迎へました。其中には春雄さんのお父様も、お母さんもいらつしやりましたから、春雄さんはすぐ、お父さんや、お母さんに、

「只今歸りました。」

と挨拶しました。お父様も、お母様も、どんなにお喜びになつたでせう。

五五、猿　と　蟹

昔々或所に一匹の蟹が居ました。

或日猿と連れ立つて、山の麓を歩いて居ました。すると猿は道で柿の種を拾ひました。蟹は川端でおむすびを拾ひました。蟹は

「これは良い物を拾つた。」

と、言つて猿に見せました。猿は其のおむすびが欲しくて欲しくて堪りませんでしたから、

「この柿の種を取り替へて下さい。」

と、言ひましたら、蟹は、

「厭です。おむすびの方が大きいもの。」

と、言つて聞きませんでした。猿は真面目な顔をして

「成る程柿の種は小さいが、蒔いて置くと芽が出て、木になつて、甘い實になるよ。」と、言ひましたので、

蟹は柿の種が欲しくなりましたから、

「それなら取り替へよう。」

と、言つてとうとう取り替へました。

猿は蟹の見て居る處で、ムシャ／＼とおむすびを食べました。食べて終ふと其まゝノソ／＼と家へ歸りました。蟹は柿の種をお庭に蒔きました。そして種に向つて、

「早く芽を出せ柿の種、出さぬと鉄でチョン剪るぞ。」

と、何度も言ひました。すると間もなく可愛い、芽が出ました。蟹は又芽に向つて、

「早く木になれ柿の實よ、ならぬと鉄でチョン剪るぞ」
と、何べんも言ひました。

すると芽がズン／＼伸びて、大きな木になりました。枝が出て葉が茂りました、花も咲きました。蟹は又木に向つて

「早く實がなれ柿の實よ。ならぬと鉄でチョン剪るぞ」

と、何べんも言ひました。すると澤山實がなつて赤くなりました。

蟹は柿の實を見上げて嬉しうて堪りません。そして

「どうも美味相だ。一つ食べて見よう。」

と、言つて手を差し伸ばしましたが、せが低いので、どうしても届きません。そこで横這ひで登りかけましたが、恐怖くなつて途中から降りました。そして毎日々々悔しさうに下から眺めて許り居りました。すると其處へヒヨッコりと猿が來ました。垣根の傍を通ると庭に大きな柿の木が生えて、眞赤な實が鈴なりになつてゐましたので、もう欲しくて堪らなくなりましたから直ぐに、

「蟹さん、何をして居るの。」

と、聲をかけました。蟹は、

「オウ猿さんか。柿が彼んなに赤くなつたが、取れませんので困つて居る處です。」
と、言ひました。猿は黙つて柿の實を見上げて居ましたが、纏て、

「こんなに立派な實がなるのであつたら、おむすびと、取り替へつことを、しなければよかつた。」

と、思ひました。

蟹はもどかしくなつて、

「どうか取つてお呉れよ。お禮に十や二十は上げるから。」と、頼みました。すると猿は、

「ぢや、取つて上げよう。」と言つて、スル／＼と柿の木に上つて行きました。そして程よい所に座り込んで、先づ一つもいで、ムシヤ／＼と、食べ初めました。そしてわざと大きな聲を出して、

「どうも美味しい柿です。」

と、言ひました。それから又一つ取つて食べました。蟹は下から其れを見て居ましたが、羨ましくて堪りません。

「オイ、自分許り食べないで、此處へ投げてお呉れよ。」と、聲をかけました。

「よし。よし。」と、猿はわざと青いのをもいで投げました。蟹がそれを拾うて食べて見ますと、溢くて溢くて舌がしびれさうでした。

「こんな溢いのは駄目です。もつと甘いのお呉れよ。」

「よしよし」

猿は又青いのをもいで投げました。拾つて食べて見ますと、矢張り溢くて舌がしびれさうでした。

「駄目々々、溢いのばかりです。本當に甘いのお呉れよ。」

「五月蠅な。そんなら是は何うだ。」

と、猿は真青のをもいで、蟹の甲を目懸けて、力一ぱい投げ付けました。

皆さん何うでせうか。蟹と猿とどちらが良いでせう。

五六、兎の腹太鼓

或お山に小さい一匹の兎が住んで居りました。この兎はまことに氣樂な兎で、いつもニコニコと嬉しげうにして、御用の無い時は廣い野原へ出て、

「をどれをどれ、香氣にをどれ

ながいお耳を動かして、

「ピョンピョンピョンピョン踊りませう。」

と、うたうてその長い耳を振り、その細い足をはねくりまはして、無中になつて踊つて居ました。

或日の事、すつとすつと山奥に居る、この小兎のお祖母さんが來まして、

「こんど、お月様が眞圓くおなりになつたら、お祖母さんの所へおいで、澤山御馳

走まわをして、もつともつと大きな兎うさぎにして上げるよ。」と言いひました。
小兎こうさぎは大おほ喜びで、

「まるなれ、まるなれお月様つきさまん、お月様つきさまん早くまるくなれ、まんまん丸まるくなつたなら、私も大おほきくなりませう。」

と、歌うたうて踊まり、お月様つきさまんの大きくなるのを、待まつてゐました。

その内うちお月様つきさまんが、真まん丸まるになりました。小兎こうさぎはサアお祖母おばあさんのとこへ行いつて御馳走ごちそうになるのだと、ビヨンビヨン踊まりながら、

「それそれなつた、それなつた、

お月様つきさまん圓まるくなりましたした、

お山やまの奥おくの祖母おばあさんの、御馳走ごちそうよばれに行いきませう。」

と、歌うたひながら、山奥やまおくの方ほうへ出でかけました。

だんだんと参まりまして、一本松ほんまつの所ところへ來きますと、横合よこあひから大おほきな聲こゑで、「コラッ待まてつ。」と云いひます。小兎こうさぎはびつくりして歌うたふのを止やめて、



「ハイ何ですか。」

と、振りかへりますと、一疋の狼が大きな目をひいて、

「この狼に見つかったら、逃げよとて逃がさぬぞ、おとなしく己の御馳走になれ。」
と、すぐにも飛びかゝりさうにしてゐます。兎はビヨンと跳返つて

「待つた待つた、わたしは祖母さまの、

御馳走よばれにゆくところ、

御馳走よばれて歸るとき、わたしは太つた大兎

大きい兎がおいしいか、小さい兎がおいしいか。」

と、踊りながら、ずんずん行つてしまひました。

狼は、歸るときに大きくなつて来るなら、ちつとの間待つて、大きなのを食べてや
らう、その方がおいしいと思ひましたので、兎を追ひかけずに、そのまゝ逃がしてや
りました。兎はだんだんと踊りながら、二本松の處へ来ると、又一匹の熊が出て来て、

「コラ待て、この熊に見つかったら、逃がさんぞ、おとなしく御馳走になれ。」

と、言ひました。兎は前の通り又

「待つた待つた、わたしは祖母さまの、

御馳走よばれにゆくところ、

御馳走よばれて帰るとき、わたしは太つた大兎、

大きい兎がおいしいか、小さい兎がおいしいか。」

と、踊りながら。行つてしまひますと、熊も大きい方がおいしいから歸つて來るときまで待たう、と追ひかけずに逃がしてやりました。

兎は今度も工合よく逃がれて、三本松の處へくると、又大きな鷲が來て、

「御馳走になれ。」

と、言ひましたが、これも前と同じやうに跳つてのがれ、やうやうに、お祖母さんのお家にまゐりました。そしてお祖母さんに、途中の御話をしますと、

「さうかへ、それは恐い事だつたね、それでもお前が可愛くてニコニコして居るから、許して呉れたのだらう。よかつたね、御馳走をたくさん拵へてあるからゆつ

くりお上り、お祖母さんの拵へた御馳走を食べると、見違へる様に大きくなるよ。」と、言ひました。小兎は、あゝおいしいおいしいと、その御馳走を食べると、一ぺん一ぺんに體が大きくなつて、五日目には、丁度五つもよせた程、大きな大兎になりました。兎は

「なつたなつた、大きくなつた大兎、

太つたおなかは大鼓腹、たゞけばびびく大太鼓、

ドドンコドン、ドンドンコドン、

ドドンコドン、ドンドンコドン。」

と、おなかを叩いて踊りました。

それ迄は大變よかつたのですが、困つたのはお歸りする時です。三本松には鷲、二本松には熊、一本松には狼が待つてゐてこんなに太つて、大きくなつて通つたら、きつと、せれかに食べられてしまふに違ひない、と、このニコニコ兎も大層心配しましてどうしたらよいだらうか、さうだお祖母さんに聞かう、お祖母さんだつたら何でもよ

く知つていらつしやるから、

「ネエ、お祖母さま、わたしが歸る時、鷲や熊や狼が待つてゐると困ります、どうして行つたらよいでせう。」

「よしよし今お祖母さんが、よい事を教へてあげる。」

「言つてお倉の中から、一つの樽をころがして來ました。」

「サアここへお遣入り、中で踊つてごらん。」

踊り兎は其中で踊りますと、まうい工合に樽がころがります。お祖母さんは樽に蓋をして、

「うまいうまい、さうやつて踊つてお歸り、さうしてお腹をドンドンコドンドンと、叩いて行けば、鷲でも熊でも狼でも、太鼓だと思つてどうもしませんよ。そのかはり、誰が何といつてもお家へかへるまでは、ものを言うてはいけませんよ。」

「あり難う、あり難う。」

と、踊り兎は、お祖母さんにお禮をいつて、その太つたおなかをドンドンコドンドン、ドド

ンコドンドンと、叩きながら、ころりころりと轉がつて、歸り道につきました。

三本松には先の鷲が、もう兎が大きくなつて歸る時分だと、待ちかまへて居りますとコロコロと樽がころがつて來ます。

コラツと聲をかけましたが、唯ドンドンコドンドン、ドドンコドンドンとなつて轉がつて行きますので、「何だ太鼓か。」と言つて、何もしませんでした。二本松の處でも熊が待つて居ましたが、やはり其通り、ドドンコドンドンと、ころがつて行きますので、太鼓だと思つて、どうもせずに見て居ました。

一本松の狼も其通りで、踊り兎は何の怪我もせず、樽の中で踊りをとり、自分のお家へかへつて、相變らず、ドドンコドンドン、ドドンコドンドンと、囃してをりましたとさ。

五七、二つの壺

或るところに春雄さんと、次郎さんと云ふ仲好の子供がありました。

いつも一緒に遊んでゐましたが、春雄さんは、ハキハキした、そして元気でやさしい子でありました。次郎さんは、いつも、グズグズして、お菓子ばかりたべて、元氣のない子でした。

春雄さんは、飛行機が大層好きで、いつも飛行機をそばかりして遊び、飛行機がとんで来ると、羨ましそうに眺めて、僕も、一べん乗つて見たいな、鳥や、つばめはいつも空をかけまはつて、どんなに面白い事であらう。僕も、鳥になりたいなあ、つばめになりたいなあ、と、毎日空ばかり眺めてゐました。

春雄さんの家には、神様が祀つてあつて、いつもお母さんや、お父さんが拜まれます。春雄さんも毎朝お顔を洗ふと、神様の前に行つてお禮をしてゐました。

春雄さんは神さんに空を飛べる様にして下さいと、毎日一生懸命におたのみしました。或る晩のこと、春雄さんが眠つてゐますと枕邊に立派な白い長い髯の生えたお爺さんが立つて、

「春雄、春雄、」と呼ばれました。

春雄さんは、びつくりして飛び起き、お辭儀をしますと、白髯のお爺さんは、

「春雄、お前は空を飛んで見たいさうな、お前はふだん元気でやさしい、よい子だから、明日から空をそばせてやらう、お前の家の裏のところに、二つの壺がある。

一つの壺の中には黒い薬が入つてある、も一つの壺には白い薬がある、白い薬をお前のからだに塗るとお前はすぐに大きな立派な鶴になる。若し間違へて、黒い方を塗ると、牛になるからまちがへない様にしなさい。さうして、人間になりたかつたら、菖蒲を食べるとよい。」と云つて、立派なお爺さんは、消えてしまひました。春雄さんは、ふと、眼がさめまして考へますと、今のはみんな夢でしたが、春雄さんは、どうも夢のやうに思へませんので、すぐ裏口へ出て見ますと、不思議なことには、お爺さんの言はれた通り、ちやんと壺が二つあります。

春雄さんは、そつと蓋をとつて中を見ますと、一つは、白い薬が入つてあり、も一つの方は黒い薬が入つてありました。

それから春雄さんは何だか嬉しくてたまりませんから、其所へいつて お母さんが張

物をなさる、糊の刷毛をもつて来て、白い方の薬をからだに塗りますと、あら不思議や、春雄さんのからだは俄かに鶴になつて空高く舞ひ上りました。

お山やら、川やら、家やらがずつと下に見えます。

電車や、汽車がおもちやのやうに小さく見え、人は豆粒のやうに見えます。

鶴の春雄さんは、面白くてたまりませんから、あちら、こちらと、とびまはり、大分、つかれましたから。おうちへ歸らうと思つて神様に聞いた菖蒲を池のふちでとつてたべましたら、元の春雄さんになりました。

お隣の次郎さんが此事をきいて、急に鶴になつて飛んで見たくなりましたが、春雄さんが、どうして鶴になつたか、分りません。

或日のこと、いつになく朝うす暗いうちから起きて、そつと春雄さんのお家の裏の方をすき見してゐますと、暗くてわかりませんが、何だか春雄さんはからだに塗つてゐましたが、すぐに鶴になりました。次郎さんは、あゝ、わかつた、春雄さんは何か、からだに塗るのだ、僕も、明日の朝、うす暗いうちに起きて、あそこへいつて塗つて

見ようと思ひまして、翌朝うす暗いうちにおきて手探りながら、壺の蓋をわけて、そこにあつた刷毛で、薬を塗りました。

それが、黒いお薬でありましたからたまりません。

次郎さんは、すぐさま四本の足と、二本の角が生えて、牛になりました。

次郎さんは、びつくりして元の次郎さんにならうと、一生懸命にもがき、聲を出さうとすると、

「モー」どうなります。

次郎さんの牛は、もがき、もがいて、

「モー、モー、モー、」と云つて野まで行きます中に、お日さまが、高く昇つて、夜があけました。

すると、そこへお百姓のをぢさんが通りかゝつて、

「こんなところに牛が遊んでゐる、うちへ連れて行つてやらう。」といつて、つなをつけて引ばつて行きました。

さうして牛小屋へつながられました。次郎さんの牛は悲しくて、しやうがありません。さうかうしてゐる中に、大きな重い荷車を輓かされたり、せなかへ草や、糞を負はされたりしました。

これはたまらんと思つて、

「モー、モー」と泣いてゐました。

一方のお友達の春雄さんは、仲よしの次郎さんが見えなくなつたものですから、あちこちと探しまはつてゐますうち、ふと、黒い壺の事に、気がつきまして、中をのぞいて見ますと、黒いお薬が澤山へつてゐましたから、春雄さんは、びつくりして、

「次郎さん、まあ可愛さうに、何も知らずに、僕のまねをしたものだから、牛になつたにちがひない。どこへ行つたのだらう。次郎さんよ。次郎さんよ。」

と、野やら、山やらさがしまはつてゐましたところが、そのお百姓のお家に、牛が悲しさに、

「モー、モー」と泣く聲が聞えますから、もしやと走つて其の牛小屋へいつて見ま

すと、一匹のきれいな牛が、

「モー、モー」と云つてゐばれてゐます。

春雄さんは、これは、きつと、次郎さんにちがひない、どうしたらよからうと、困つてゐます中、フト、菖蒲のことを思ひ出しましたから、池のふちへいつて、菖蒲をとつて次郎さんの牛にたべさせました。

すると、牛の次郎さんは、元の次郎さんになつて、大それたよるこびまして、春雄さんにお禮を言うて、一しよにお家へかへりました。

五八、山羊と狼

山の奥の奥の方に山羊のお母様がありました。

お母様のお腹から子が一度に三匹生れました。お母様は良いお乳を澤山持つて居りますから、子供は甘味々々と言つて、それを呑んですん／＼大きくなりました。

山羊の赤ちやんは大分大きくなると今度は何ぞが欲しい欲しいと言ひ出しました。そこでお母様は

「それではお母様がこれから山へ行つて、よい物を取つて来て上げるから、留守番をしていらつしやい。若しお母様の留守の間に狼が出て来るかも知れないから、戸を開けないやうにしないよ。お母様の聲はこんなに可愛いのでせう。いやな聲が聞えたら、それはお母様と違ふから開けてはいけません。それからお母様の顔も頭も手も足も脊中も眞白でせう、そして觸つて見ると柔らかいですね。若し茶色の堅い毛をして居たら、それは狼だから、開けないやうにしないよ。さあ、お母様は是から行つて来るから、よく留守番をしてゐるのですよ。それじゃ行つて来ますよ。さやうなら。」

と、お母様は行つてしまつた後で、皆はぢつとして大人しくして待つてゐました。すると其うちに表の向ふから、のそ〜と大きな音がして来たと思ふと、門の戸をト
ン〜〜〜

「お母さんぢや。」
と、いつて戸を叩きました。

「ああ、お母様か知らん、いや〜、今のは恐い聲をしてゐるから、お母様と違ふ。狼は仕方がないから山の方へ歸りました。

「どうしたら開けて呉れるか知らん。あ、さう〜山羊のお母様は可愛い聲をしてゐた、今度は可愛い聲をして行つてやりませう。」
そうつと歩いて行つて、トン〜〜〜

「お母さんぢや。」
「あつお母様か知らん。いや〜若しお母様と違つたらいけないから、一度足をお出しというて見やう。」

「足をお出し。」
狼はそつと戸の下から足を出しました。
「あつ、茶色です。お母様と違ふ〜。」

狼は又困つてしまつて歸へつて行きました。

「どうしたら開けて呉れるか知らん、さうだ、山羊のお母様の體は白うて柔かい。どうすればあんな體になるか知らん。どうしたら良いか知らん。」

ど、大きな松の木の下へ来て考へてゐましたが、ふつと上を見ると大きな松脂がくつついてゐますので、

「ああ、よい物を見つけた。彼の松脂は飴の様によくひつつくものだから、あれを取らう。」

ガサ／＼と、搔きのぼつて、それを取つて来て頭も顔も手も足もお腹も脊中も、一面に松やにをひつつけました。そしてそこへ、うどん粉をバラ／＼と振りかけました。一寸觸つて見ますと柔かい。これで總べて山羊のお母様と同じやうになつた

「さあ。行つて戸を開けて貰はう。」

ど、そつと歩いて行つて、トン／＼／＼／＼

「お母さんぢや。」

「足をお出し。」

「ああ、白い。」

そして觸つて見ると、柔かい。聲は可愛らし。

手も足も白くて柔かい。

「事によるとお母様かも知れぬから、一寸開けませう。」

ど、そつと少し開けると、狼がガラツと開けました。

子供は吃驚して、一人の子はお母様の針指の引出しへ隠れました。

一人の子は押入の蒲團の後へ隠れました。一人の子は柱の時計の後へ隠れてぢつとして居りました。

狼はのそ／＼と這入つて来て、

「子供は皆何處へ行つたのか。」

ど、いつて針指の引出しの子を、一べんにガブツと、食べました。

「まだ二匹は何處へ行つたか。」

と、いつて、押入の蒲團の後の子を、カブツと食べました。

「まだもう一匹居たが何處か。」

と、探しますけれども、とうとう見付けられません。

其の内に喉が渴いて、水が欲しくなりました。

山羊の家の水のある所を知らないものですから、とうとう山の方へ歸つて行つてしまひました。

そのうちにお母様がザルの中に、柿やら林檎やら栗やら、蜜柑やらを、澤山持つて歸つて来ました。

「あつ、戸が開けてある。どうしたのか知らん。これくお母様が歸りましたよ。

皆何處に行つたのか。」

といつて探して居ますと、

「お母様、此處です。」

と、時計の後から言ひました。

「まあ、そんな處で何をしてゐるのです、早く下りていらつしやい。」
チヨコくくと下りて来ました。

「他の子供は皆どうしました。」

「あのね、大きな狼が来て、二人共カブツと、食べて行きました。」

「それはまあ可愛相に、早くお前、鍬と針と糸と三つお持ち。そして早く助けに行つてやりませう。」

と、言つて子羊とお母さんと手を繋いで、急いで狼が行つた方へ探しに行きました。

ところが向ふの方から、ゴウくくく

「あつ。大きな音がする。何だらう。彼の方へ行つて見やうか。」

と、行つて見ると、綺麗な水がサラくくと、流れてゐる處に、狼が大きな岩を枕にして、ゴウくくく、と寝てゐます。

「ああ、寝てゐるく。」

とつと行つてお腹を撫でて見ると、グワく動いてゐます。

「此狼だ。此狼だ。早く鉄をお出し。」

お母様は狼のお腹を、チヨキ／＼と、はさみ剪りました。子供が

「お母様。」「お母様。」

といつて、出て来ました。

「ああ。嬉しい／＼。さあ皆で大きな石やら小さい石を拾つて、狼のお腹へ入れな
れよ。」

皆で一杯入れました。

「針をお出し。」

お母様は狼のお腹を、クリツ／＼と縫ひました。それでも狼は知らずに寝てゐ
ます。

「早く歸らう。」

と、言つて皆で手を繋いで歸つて来ました。

五九、赤 帽 子

或る所に花ちゃんといふ可愛らしい／＼可愛らしい女の子がありました。
眼はバツチリとして、色の白い綺麗な御顔、薄等は決して見せた事がありません。何
時でもニコ／＼とした元氣な良い子でありましたから、誰にでも可愛らしい／＼といつ
て、大層可愛がられて居りました。其中でも此の子供のお祖母様の可愛がり様といつ
たら、一通りではありませんでした。何時も／＼お祖母様は此の女の子を見ると、直
ぐ抱いたり負んぶしたり、又綺麗なおもちゃを買つてやつたりして居りました。それ
で此の子供もお祖母様を誰よりも好きだといつて居りました。
或る日の事でした、お祖母様が此の子供に眞赤な美しい帽子を持つて来て下さいまし
た。サア花ちゃんはこの物を見て大悦び、その赤帽子を被つては、

「嬉しい／＼こんな良い物をお祖母様が下さつた。」

と、何時も飛び廻はつて喜んでゐました。晩に寝る時でも、御飯を戴く時でも、お湯

に入る時でも、お遊びする時でも、何時もこの赤帽子をはなした事はありませんでした。

それで近所のお友達やお母さん迄が、この子供の事を赤帽子さん赤帽子さんと、呼びました。それでも此の子供は大悦びで赤帽子を被つて、大事にして居ました。

或る日曜日の事でした。丁度其の日は赤帽子さんの御誕生日でありましたので、お母さんは赤帽子さんと呼んで、

「サア、赤帽子や。このお餅をお祖母様のところへ持つてお出でよ。お前が持つて行つたら屹度お悦びであらうよ。」

「ハイ、お母様それでは是から直ぐ、お祖母様の所へ行きませう。」

ど、いつて又赤帽子を被つて、一つの風呂敷包を抱へてお祖母様のお家へ向つて急ぎました。

お祖母様の御宅は餘程遠いので、お母様が心配せられて赤帽子が出る時に、

「赤帽子よ。どうか怪我のない様によく氣をつけて行くんですよ。用事が済んだら

早くお歸りなさいよ。」

赤帽子さんは、

「ハイ。お母さんよろしいです。行つて参ります。」

ど、元氣よく出て行きました。

お祖母様の家は小山の中にあつて、淋しい所でありました。赤帽子さんは早くお祖母様にお餅を持つて行つて上げませうと、一生懸命になつて、小山の中へ入つて行きました。

さうすると何處からか、

「赤帽子さん。赤帽子さん。」

ど、呼ぶ聲がします。

赤帽子さんは不思議に思つて、

「誰だらう。こんな所で私の名を呼ぶものは。」

ど、フと後の方を見ますと、それは一匹の大きな狼でした。赤帽子さんは一寸も恐怖

がりませんでした。

「狼がどんな悪い獣であるか知りませんから、何とも思ひませんでした。狼は赤帽子さんを見て、」

「赤帽子さん。赤帽子さん。あなたは何處へお出でになるのですか。手に持つていらつしやる風呂敷包の中には何が入つて居ますか。」

と、尋ねました。そこで赤帽子は、

「ハイ、私はねこれから私のお祖母様のお宅へ、お鮓を持つて行くところなの」と、言ひました、すると狼は、

「あゝ、さうですか。それなら私にも其のお鮓を頂きたいです。」

赤帽子は一寸困りました。

折角お祖母様にと思つたものを、狼に取られてしまつてはと思つたので、

「狼さん。これはお祖母さんに上げる積りで持つて來たのですからね、今日はどうか許して下さい。明日又狼さんにも持つて來ませう。」

と、いひました。然し狼はどうしても聞いて呉れません。仕方がないから赤帽子は、

「それでは狼さん。私と一緒にお祖母さんの家まで、お出でよ。さうしたらお祖母さんに頼んで狼さんにも貰つて上げませう。」

と、言ひました。

そこで狼は漸くそれを聞き入れて、狼は赤帽子と一緒にお祖母様の家へ行く事になりました。

ところが狼は何時も山の中に棲んで、道もよく知つて居ります。足も早く何時の間にか狼は赤帽子よりもずつと先になつてしまひました、

狼は後の方を眺めては、

「赤帽子は遅いな。遅いな。」

と、言ひ乍ら不圖考へました。

「それでは一つ自分が先にお祖母様の家に這入つて、お祖母様を吃驚さしてやりませう。」

と、思つて又一生懸命に走りました。

狼は躑躅してお祖母様の家へ着きました。トン／＼と戸を叩きますと、中からお祖母さんが、

「誰かね」

と、言ひました。狼は、

「ハイ私です、赤帽子ですよ、お祖母様に御馳走を持って来ました。戸を開けて下さい。」

と、言ひました。

お祖母さんは丁度其時寢床に這入つて居ました。

「オオ、赤帽子か。直ぐお這入り。戸をおあけなさい。」

と、言ふのを聞いて、狼は直ぐ跳上りました。

お祖母様はこれを見て吃驚仰天してしまひました。キヤツと言つて裏の方へ逃げてしまひました。

狼はそこで今度は自分がお祖母様の寢床に這入つて、丁度枕元にお祖母様の眼鏡がありましたので、それをかけて、蒲團を被つて知らぬ顔で寢て居ました。

丁度其時に赤帽子はお祖母様の家に着きました。

来て見ると戸が開け放してあるので、是は變だなあ、と思ひ乍ら中へ入つて、

「お祖母さん、お祖母さん」

と、呼んで見ましたが、一向に返事がありません。

そこで寢床の側に行つて見ますと、何だかをかしな人が寢て居るので、

「マア、お祖母様の顔は今日は何といふ變手古な顔だらう。眼鏡は何時もこれであるが、マア、お祖母さんの耳は何といふ大きいのだらう！」

「よく聞えるやうにさ。」

と、答へる。

「マア、お祖母様の目は何と大きいんだらう。」

「よく見えるやうにさ。」

「お祖母様の手は何と大きいんだらう。」

「お前を抱くのにいゝのさ。」

「お祖母様の齒は何と大きんだらう！」

「お前を食べるのにいゝやうにさ。」

と、言ふと狼はもう寢床から跳出した、一口に赤帽子を食べやうとしました。

其處へ丁度折よく、お祖母様が一人の獵師を案内して來ました。獵師は用意の鐵砲で

狼目かけて、ドンと一發。狼はみごとに其の場でうたれてしまひました。

お祖母さんと赤帽子とは、恐ろしかつた事もうち忘れて其の悦びは非常なものでした。

(238)

六〇、私 は 楓

暑い夏も過ぎ、涼しい秋の時候になりました。

黄色や、白色の菊の花が咲き、雁の飛んで來るのも、丁度此頃で、木の葉も大分黄色



や棒色になり、楓も赤く色づき人が見にゆくやうになりました。

さて箕面のお山に大きな一本の木がありました。

楓の葉は丁度皆様のお手を広げたやうな形をしてゐます。楓さんは毎日く元氣の良
い顔をして、鳥の啼くのを聞いたり、雁さんの水泳ぎを見たりして、毎日暮して居り
ました。

段々と寒くなつて來ました。或晩のこと楓は遅くなつたから、もう寝やうと思つて床
に就きました。

暫らくうつ／＼としたかと思ふ頃、何だか顔に冷い物が觸りました。

楓「あゝ何だらう、冷たいものがかかつたが雨が知らん。」

と、言つて顔を撫で、又寝かけますと、冷たいものがまたもかかりました。

「おや／＼又かかつた、雨でもないやうだが何だらう、可笑しいな。」

と色々考へましたが、どうも分りません。すると又かかりました。

楓は一度何がかかると、そつと細く眼を開けて見ますと、如何でせう。

美しい〜お姫様が、綺麗な瓶を左の手に持つて、右に筆を持ち、楓の顔をチヨイ〜と塗つて居られます。

楓は餘りお姫様が美しいので、何も言はずお姫様のする通りになつて居ました。

さうする内に段々眠くなり、楓は寝てしまひました。夜が明けたのか、雞の鳴く聲に驚いて、目を醒しますと向ふの方で、櫻や銀杏が何かワヤ〜と話して居ります。

楓「やあ皆様お早う、大分賑やかですなあ。」

銀「おや〜楓さんも、顔が變つて居ますなあ、櫻さん見て御覽。」

楓「えー僕の顔の色が變つて居ますつて、アアあなたも、あなたも。」

と、楓は不思議相に顔を見てゐます。そして思ひ出した様に、

「さう〜銀杏さん、僕ね昨晚こんな夢を見ましたよ。」

銀「まあさうですか。」

楓は皆に昨晚の話をしました。銀杏も櫻も、

銀櫻「私等もそれと同じ夢を見たんです。そして今朝起きて見ますと、顔色が變つて

居ましたよ。」

と、皆寄つて昨晚の出来事を話し合ひました。

變つた顔の色は楓は紅、銀杏は黄、櫻は樺や黄のゴチャ〜の色でした。

楓「櫻さんあなたはお姫様が混せ〜に塗られたのですね、銀杏さんは黄色ですね。」

銀「楓さんは紅ですね、可笑しいな。」

と、色々話をして居りました。

すると寒い風がビュビュと、吹き出しまして、今迄はしつかりとしてゐた首が、グラ〜と動き初めました。

楓「ヤ〜〜銀杏さん僕今迄どうもなかつた首が動き出してききましたよ、やあー落ちさうだー。」

銀「おや〜楓さんですか、私も急に首がぐらつき出しました。若し若し櫻さんには。」

櫻「やああなた方もですか、私も何だか落ちさうですから、手で持つて今、あなた方に尋ねやうと思つて居た所です。」と、言つて、三人は皆両手で首を押へて、風のビユウ／＼吹く度に、

楓、櫻、銀「アアー落ちさうだ、どうしませう。」

ど、一生懸命首を押へて泣きさうになつてゐます。

ところが同じ山で色も變らず、首もがたがたにならず、元氣な木があります。それは松や杉などです。

楓はふと思ひ出したやうに、

楓「ねー櫻さん、向ふを見て御覽、杉さんも松さんも、少しも色が變つて居ません。どうしたのでせう、一度松さんに聞いて來ませうか。」

ど。一緒に首を押へながら、松のところへ尋ねにまゐりました。

楓「松さん、此頃は大分寒くなりましたね、何時も元氣で結構です。時に松さん、私等は今日一寸お尋ねにまゐりましたので實はかうかう」

ど、楓は昨夜の事から、首の動き出して來た事迄委しく松に話しました。

松「うんさうですか、それは秋の神様が、あなた方の顔をお塗りなされたので、大變綺麗です。私等を除けた外は、皆色が變つてゐるのでせう、首のグラ／＼するのは、もう近々のうちに落ちてしまふのです。」

三人「えー首が落ちるのですか、本當ですか。」

ど、大層驚きました。松は落着いて、

松「いや何もそんなに驚かなくてもよろしい、首が落ちても又來年の春になれば、新しい芽が出て、又美しくなりますから、心配しなされるな、そして色の變つた木は皆首が落ちるのですから。」

楓「さうしたら山は木が皆なくなりませう。どうしませう。」

松「それはあなた方が皆散つてしまつた後は、僕等がチャンとお留守番をしてゐますから、心配はせないがよろしい。」

ど、いつて聞かせました。

「どうも有難うよく分りました、左様なら。」
 と、言つて歸らうとしました時に、冷たい風が、ビューと吹いて来て、今にも落ちさうだつた首が、コロリと落ちてお山から、ヒウ〜と飛んで川へ落ち、美しい水に乗つて流れて行きました。

六一、蛙

「これは何でせう？」

「お玉杓子です、蛙の子です、お母さんの蛙は、寒い間ぢつと土の中にすくんで居ましたが暖かくなつたので、出て来てお池の中で、このやゝさんを生みましたのです。」

蛙の形のやゝさんでなくて、をかしいですね、猫や犬は如何でせう。大きくなる迄にはいろいろな形に變つて行つて、お終ひに、お母さんのやうな蛙になるんですよ。

こんなお玉杓子が暫くすると後足が出来て、又暫くすると前足が出来て、尾がなくなるよ、もうこれで、大人の蛙になつたので、足が揃ふとビヨンビヨン飛べるから、お池の外へ出て遊びます。

大きくなつても、泳は矢張お上手で、(海水浴に行くよ、高い所から海の中へ、かう伸してスードボンと、飛び込んでゐますね。) あんな風に、お池の中へ飛びこんでは又泳いで行つて田畝道へ出ますのよ、鮒や鯉などは如何です、お池から出したらどうなるでせう？ さうさう死んでしまひますね。

蛙がお池の中へ飛び込んだり、ビヨンビヨン躍んでゐるのを見た事がありますか、こんなに水の中で遊べるし、上へ上つても遊べる者が、未だ外にもありませんね。さうさう龜さん、さうすると龜さんと蛙さんとは同じやうですね、龜さんと蛙どくらべたら、どちらが大きいでせう？ けれども蛙の中には、龜さん程の大きなのが居ますよ、ヒキガヘルといひましてね。お舌をペロリと出しては、ス〜と蟲なぞ吸ひ込んで喰べますのよ。小さい蛙でも皆さうなのですよ。

そしてね、またをかしいのは、薄緑色した先生の親指の先程の、小さいこれ位の可愛らしい蛙がね、捕へると、ビヨイとお小便をかけて、逃げて行くのがあるんですよ、これを雨蛙といひます。

六二、天狗の太鼓

或田舎に柑太郎さんといふ子供がありました。

ある冬の寒い日の事、お母さんが、

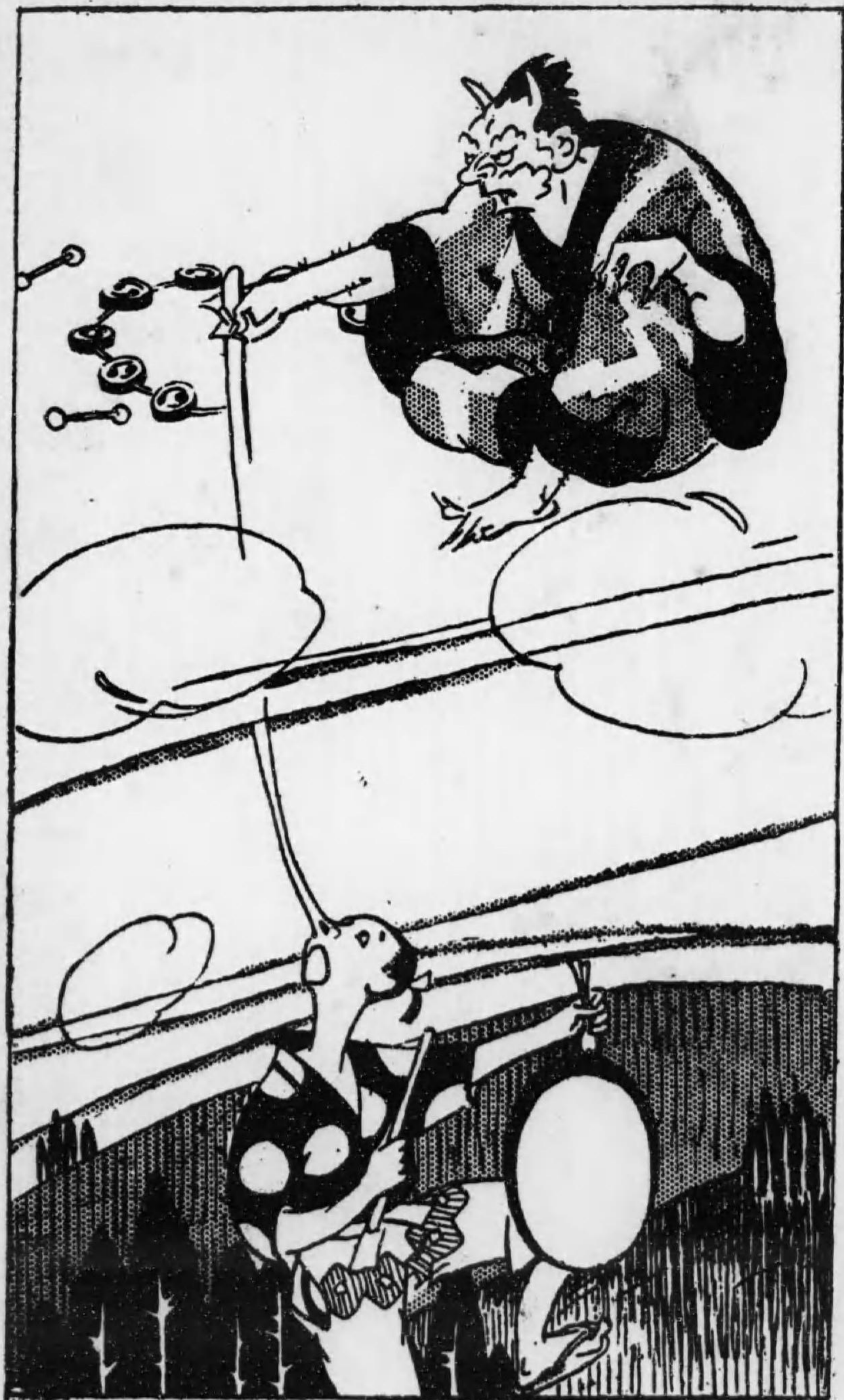
「柑太郎や。裏のお山へ行つて蜜柑を取つてお出で。」

と、言ひ付けられましたので、柑太郎さんは籠を手に、裏の山へ登つて行きました。

冷い風がヒユウ〜と吹いて、雪さへちらついて来ました。

柑太郎さんは大急ぎで、お蜜柑の籠に一ぱい取つて、

「ちのめ歸らう。」



ど、山を下つて参りますと、頭の上の方で、トントコ、トントコ、トントコ、ど、大鼓の音がしたかと思ふと、

「ヤイ。柑太郎。」

ど、呼ぶ聲が致します。

ヒヨイと振り返つて見ると、鼻の高い赤い顔をした天狗でありました。柑太郎さんは大吃驚。

「どうぞ生命だけはお助けを。」
ど、頼みました。天狗は、

「ハハハハハハ、臆病な奴だ。何もお前の生命を探らうとは言はないのだから、そんなに心配しなくてもいい、實はお前の持つてゐるその蜜柑を私に呉れまいか。」

「どうして〜、是は私が母様から言ひつけられた蜜柑。持つて歸らねばなりませんね。」

「イヤ呉れると、いつても唯で貰はうとは言ふのぢやない。代りを出して譲つて貰

「ひたいのだ。」

「それでは何を代りに下さるのですか。」

「太鼓を上げやう。」

と、いつて可愛らしい美しい太鼓を出して見せました。

「ソーソー。綺麗な太鼓だらう。これが又ほんとに面白い大鼓でね。」

「ヘエー。そんなに面白いのでせう。」

「この太鼓の表の方をボン／＼叩いて、天狗の鼻々高くなつたり、なつたり。」「と口で唱へてゐると、自分の鼻が思ふやうに高くなり、強く叩けば急に高くなるし、軽く叩けば少し宛高くなる。若しまた高くなつた鼻を元のやうに低くしやうと思つたら今度は太鼓の裏の方を叩いて、『おかめの鼻々低くなつたりなつたり』と、いふのだ。」

柑太郎さんは全く感心してしまつて、大悦び、

「よろしい、代へませう。」

と、蜜柑と太鼓を取り代へました。

柑太郎さんは直ぐに太鼓の表の方を、トン／＼／＼叩いて、

「天狗の鼻々高くなつたり、なつたり、さあなつたり」

と、言うて見ますと、眞實に自分の鼻が少し宛高くなりました。今度は元のやうに低くしやうと思つて、太鼓の裏の方を叩いて、

「おかめの鼻々、低くなつたり、なつたり、さあなつたり。」

と、言ひますと、高くなつた鼻が少し宛縮んで、やがて元のやうになりました。

柑太郎さんは太鼓の叩き方一つで、自分の鼻が思ふやうに、高くも低くもなりますので、もう嬉しくて／＼堪りませんので、今度は一つ思ひ切つて鼻を高くして見やうと思つて、太鼓の表の方を強くトントコトントコと叩いて、

「天狗の鼻々高くなつたり、なつたり、さあなつたり」

と、申しますと、サア、さうでせう。

柑太郎さんの鼻は見る／＼うちに、ずん／＼伸びました。

柑太郎さんは面白いので夢中になつて、伸びるだけ伸ばして見やうと思つて、仰向いて鼻を真直に空の方へ向けて、威勢よく太鼓を叩いて居ますと、鼻はどこまでも、何所までも伸びておしまひには、雲を突き破つて天の上まで届きました。

柑太郎さんの立つて居る所の上は丁度雷様のお住居でした。雷様も此頃は寒いものだから、外へは出でず、家の中で大きな圍爐裏に火をドン／＼焚いて温くもつていらつしやいますと、圍爐裏の隅の所の灰の中が、ムク／＼と圓く尖つた變なものが突き出てまゐりました。

雷様は、

「オヤ變なものが出て來たよ。オヤ／＼段々丈が高くなる。一體何だらう。」

どいひつつ、火箸の先で、ボンと柑太郎さんの鼻の先を叩いて見ました。

何しろ雷様の事ですから、大變な力です。こちらの柑太郎さんは、痛いとも痛くないとも、眼から火の出るやうに思つたので、大急ぎで太鼓を持直して、裏の方を力任せに、トン／＼トン／＼トン。

「おかめの鼻々、低くなつたり、なつたり、さあさ、なつたり、なつたり。」

と、叩きました。

すると柑太郎さんの鼻は今度は段々低くなつてまゐります。是を見た雷様は

「オヤ／＼どうしたんだらう。」

と大きな手で鼻の頭を掴みました。柑太郎さんは

「こりや堪らぬ。」

と、太鼓を叩くものですから、鼻が段々縮んでまゐります。鼻が縮めば縮むだけ柑太郎さんの身體は宙に吊り上げられて行きます。

柑太郎さんはもう一生懸命です。どうかして鼻を低くしなければと、有りだけの力を出して太鼓を叩けば叩くだけ身體が宙に上つて、とう／＼しまひには雲の上まで上つて行きました。

雷様にお目にかかつた柑太郎さんは、心配しながら今迄の事をすつかりお話いたしましたので、雷様はさぞや、お母様がお待ち兼ねのことと、早速お側に居た、雲の飛

行機でお宅へ送つて下さいました。

好小
き供
な の
お
話
終

附
録

附 録

第一、幼児を育てるのにお話の必要なること

幼稚園時代の児童は、お話を聴くことを無上の樂とするもので、お話は實に幼児の神身を育てる唯一の食物と言つても過言でありません。幼児はこれによつて深い趣味を感じ、樂みを覺えつゝ、歡喜の裡に廣汎な知識を培養せられ、道徳上の教訓も涵養せられて、無意識の裡に児童の智徳を啓發する最も重要な教育的價値を有つて居るものであつて、幼児を取扱ふ者の暫しの間も閑却してならぬ貴重なものであります。

第二、幼児がお話を好む理由

幼児がお話を好むのは、恰も大人が書籍を讀んだり、旅行見學乃至落語講談などを嗜みて、見聞を廣くするのを喜ぶのと同じやうに、全く知らぬ事實を覺え、色々の疑問

が氷解せられて、新しい知識が殖え思想が増し、暗夜に光明を得た様な心持がして嬉しいからであります。所謂此時代の特性たる好奇心求知心を満足させやうと務めるからであります。

第三、幼児の好むお話

- 一、禽獸蟲魚より庶物に至るまで、總てのものを人格化したもの。
- 二、兒童自身と境遇を同じくする兒童を、お話の中心としたるもの。
- 三、餘りに悲觀的のものでなく、極めて樂天的なるもの。
- 四、餘り多からぬ人数で、心が混雑せずして會得し易いもの。
- 五、餘りに簡單明瞭でなく、多少餘韻のあるもの。
- 六、内容形式など複雑でなくて、説明を要せぬもの。

第四、お話の種類と教育的價值

一、笑話 滑稽趣味を主眼とするもので意味の無いことを話の種としたものであります。無邪氣な滑稽やら諧諷が誘ひ出す笑は、大に兒童の興趣を喚び起し深い感應を與へて、精神を快活にし、血液の循環を促がし、發育盛りの兒童を暢びりさせるばかりでなく、時に親切な諷刺を與へるもので、雨天陰鬱なる日又は食事の後の座談などに利用すべきものであります。無邪氣に軽く氣安く兒童を笑はせて、悦ばせることが出来たら十分であります。最も年少兒に適したお話であります。

二、童話 所謂お伽噺の類であつて、興味を中心として教訓を含んでゐるものであります。兒童に深き興味と大なる喜悅とを與へて、沈鬱性を活動性に變ずる魔力を有し、道徳的法則やら訓誡的眞理が含まれて、知らず識らずの裡に道徳的寶庫が築かれ、積善憎惡の念を作り、處世上の教訓を感銘させるばかりでなく、其精神内容に優秀な趣味と智囊とを啓發し、崇高な情緒を培養し、偉大な想像の力も養はれて、最も兒童に愛好せられるお話であります。

三、寓話 教訓を感銘せしめる爲め興味を適當に配合したものであります。兒童に道

四、傳説 一定の年代場所である人がした面白い行蹟を傳へるものであります。傳説の興味を感せしめる部分は、誇張的假作物語でありますから、社會的關係の正確な材料と認めることは出来ませんが、之れを巧に利用すれば、我が民族的自覺を喚び起し、愛郷心やら愛國心などを強くする偉力を持つて居る趣味あるお話であります。

五、神話 神様の由來傳統言行やら、天然自然の現象などを解いた興味あるものであります。文化民族の神話は、高尚な美を感せしめ、深い趣味を味はせることが出来、益々氣高い興奮的歡喜の念が湧き出で、豊かに大きな精神を喚び起します。未開民族の神話は、自分の信仰やら感情が素朴な生地其儘露はれるのを見て、兒童として心安く親しく感せしめ、兒童の心を惹き付けて眞正な自己の樂園に導き、燃ゆるやうな悦びと、好奇心とを満足せしめるお話であります。

六、史話 昔から實際あつた人々の言行の勝れたものであります。知らず識らずの間に事の成敗の因て來るところ、正邪の應報が正しく行はれて居ることを悟らしめて、民族的自覺やら血族的感情を喚び起さしめ、眞正なる愛國心を奮起し、英雄を崇拜し又模倣する念を萌え出でしめ、各種の徳性を涵養することが出来るお話であります。

七、自然界物語 天然物と自然現象とを容易く會得せしめる爲に子供の話としたものであります。人類と他の生物との間に何等差別の念なき兒童の心に、興味を感せしめ、知らず識らず動植物の性質習慣法則特徴などの知識を豊富にし、人間以外の因果法則を會得せしめ、美はしい優しい同情の念を起さしめるお話であります。

八、實話 日々起る世の中の出來事で、知徳啓發に効果あるものであります。兒童が現在實地に目撃して居る確實なる活きた教訓であつて、大きな權威があり兒童を感奮せしめ、教訓上實に偉大な感化力を持つて居るお話であります。

第五、教育的價值ある良いお話

- 一、お話中の人物其外のもものが、相當に活動して、兒童に高尚なる喜悅を與へて、興味を喚び起し傾聴せしめられるもの。
- 二、感情の情緒が潑瀾として湧き出で、無限の興趣を與へ、兒童の徳性を涵養するに有益なるもの。
- 三、適度の空想的要素に富み、偉大なる想像力を満足せしめて、兒童の趣味を啓發し聽くことを悦ぶもの。
- 四、非常に悲哀又は慘酷なる無慈悲なお話やら、怪談繼母などのお話を避けて、害の無い淡泊で清らかな、積極的教訓の意味を有するもの。
- 五、既に經驗し熟知して、容易に理解し得る單純なもので、自分の力で想像力を働かしめることが出來て、兒童の知識を豊富にするもの。
- 六、兒童の年齢に相應し、務めて平易な標準語で、更に説明を要せず、其儘直に會得せられるもの。
- 七、お話の段落が常に新らしい出來事を含んで、兒童の頭を混亂させぬ程度の曲折變化あるもの。
- 八、お話の中に或る程度の事件が反覆せられて、能く會得し得られ興味を與へるもの。

第六、お話をする時の注意

- 一、兒童の注意を奪ふ外界の妨害物を除き、お話を聽かうとする氣分を作つて後、お話をすること。
- 二、話し初めは、低い小さい聲で話しかけ、自然に中味の主要の箇所になつてから、熱を加へ力を入れ、緩急其宜しきに適ふこと。
- 三、雨天で鬱陶しい日は、成るべく笑話の如き愉快なるお話を選んで聞かせること。
- 四、お話をする前に、お話を十分咀嚼玩味して、お話の眞髓を能く感應せしめ、完全に把握消化させること。

- 五、お話しする自身が、先づお話しに對して感應し共鳴し、眞面目に渾身の力を込めて話すこと。
- 六、氣取りて言葉を弄び奇麗な言ひ廻しをなすよりも、自然の儘に天真な飾らぬ平淡な態度で話すこと。
- 七、廻りくどい話振を避けて音聲の大小高低に留意し、顔面四肢などを適度に使うて明瞭に感得させること。
- 八、自分の心をお話しの中に入れ盡し、不自然な身振手振をすることを避け、感興湧いて自然に吾知らず、一種の肉體的表現をなす態度で話すこと。
- 九、お話しの中の事を途中で説明を加へ、又は問答をすることは、却て興味を殺ぎますから全體としてある感じを與ふれば良いと思ひ、撓みなくお話しを發展せしめ、如何なることあるも、お話しを中斷せぬこと。
- 一〇、お話し途中に於て、質問させぬ様に習慣をつけ、話し終つて後に聞札させる様にすること。

- 一一、音聲の調子が高きに過ぎると、頭を疲れさせますから、成るだけ和かい快い聲で、お話しすること。
- 一二、言葉が早すぎると、又心を疲らすばかりでなく、感じが薄くなり、話を受取る事が出来ぬ様になりますから、餘り遅からず適當の早さにすること。
- 一三、お話しの際に會得し餘韻を與へる爲に、必要に應じて、お話しの中に折々間を置き、又お話しの際に暫く靜に思考させる時間を與へること。
- 一四、お話しを幾度も繰返してゐる中に、無意識に兒童自らが會得するのを俟ち、お話し後に厭な四角張つた、御説法めいたことを加味することを避けること。
- 一五、お話しを徹底させる爲に、務めて家庭と同じ口語を使ひ、兒童の解し易い平易な言葉を用ゐて話すこと。
- 一六、同じ話しを幾度も聞きたいと要求すれば、繰返す程益々内容を了解させて、一層感じが深くなりますから、幾度でも繰返して聴かせること。
- 一七、實物又は繪畫を用意して、お話しを了解を容易にし、印象を鮮明確實ならしめ、

興味を深からしめること。

一八、お話中に繪畫を塗板に書くことは、お話を中断して注意を散漫し、お話の價値を殺ぐ虞がありますから、豫め掛圖又は塗板畫を調製して利用すること。

一九、兒童座席より話者の顔をよく見得る位置に在りて、遮るものなき様に注意すること。

附 録 終

大正十一年四月二十日印刷
大正十一年四月二十五日發行

【定價金壹圓八拾錢】

編纂者

大阪市幼稚園共同研究會

印刷者

代表者 猪俣賢三郎
柏 佐一郎

印刷所

神戸市香妻通三丁目十七番屋敷
中外印刷株式會社



發 賣 所

東京市日本橋區本石町二丁目 攝替東京二八〇
大阪市西區阿波堀通四丁目 攝替大阪四三
神戸市元町五丁目 攝替大阪九五二

寶 文 館

506

72

終